

弥生時代における首長層の成長と墳正墓の発達

岩永, 省三
九州大学総合研究博物館

<https://doi.org/10.15017/25325>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告．8，pp.17-42，2010-03．The Kyushu University Museum
バージョン：
権利関係：





弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達

岩永省三

The historical background of the growth of chieftains
and the development of burial mounds during the Yayoi period in Japan

Shozo IWANAGA

九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

The Kyushu University Museum, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan

I 問題の所在



A. 社会発展と墳丘墓形成

前方後円墳の出現に先立つ弥生後期・終末期における、首長層の形成と大型墳丘墓の出現の様相を明らかにし、その歴史的意義の解明を試みる。後期・終末期における諸現象と、中期以前における首長層や墳丘墓の出現との質的な差を明らかにする必要があるため、必要に応じて中期以前にも言及する。

弥生時代における階層化の進展と古墳の発生に関する1980年代前半までの代表的論法は、主として北部九州の集落・墳墓資料を用いて階層化の進展と政治的統合体の形成を語りつつ、古墳時代に入って巨大な前方後円墳の出現をみる機内地域について、銅鐸祭祀・方形周溝墓・土器製作技法の発信地となった点などを根拠に、政治的統合体の形成を推測し古墳時代につなげるものであった(北條2000)。

ところがここで問題が生じる。北部九州の中期までの墳墓資料では、集団間・成員間の格差が顕著であり階層差とその拡大が明瞭であるから、理論的には墳丘墓の発達が予想されるが、現実には後期以降は墳丘墓が発達しない。他方で、近畿の後期までの資料では階層差が非顕著であり、理論的には墳丘墓の非発達が予想されるが、終末期以降突如大型墳丘墓が発達する。したがって先の論法は、弥生時代中期以前における北部九州の状況と終末期以降の畿内の状況を無理に連結し、畿内では弥生時代の墳墓での格差の明瞭な拡大が検出できず階層差の形成が跡付けられないにもかかわらず、北部九州と同様な社会発展のプロセスが、後期以前においても実質的には進展していたと推定することによってようやく可能となるもので、この不整合を処理するために、弥生時代における「大和の先進性」、「大和における強大部族連合の成立」など実証的裏付けの乏しい仮説が、銅鐸祭祀や方形周溝墓の発達などから語られてきた。

B.大型墳丘墓と青銅器祭祀

1980年代以降、瀬戸内海沿岸地域・山陰地域・近畿北部地域・東海地域など各地で、後期・終末期における大型墳丘墓の発達が続々と明らかとなり、階層化や集団間関係の再編が進むようになったが、畿内では相変わらず、いわゆる纏向型登場に至るまでの物証に乏しい。

そこで、大和で前方後円墳が成立して以降の畿内地域の政治的・文化的優勢を弥生時代に遡らせたい論者は、古墳出土後漢鏡の分布形成を後漢並行期とするいわゆる伝世鏡論などを持ち出したり(松木1997)、後期以降、畿内地域が鉄器・青銅器など物資の広域流通の結節点として富を集約し、集団関係再編の中で卓越したと主張する(松木1996・1997)。また、かつて共同体祭祀と考えられてきた銅鐸祭祀の発達を、首長層の戦略であり大型墳丘墓の発達と等質の現象と捉え、大型墳丘墓が発達しなくても首長層が階級的に成長していた証左とみなす(桑原1995、松木1996・1997、福永1998)。そこで小稿では、大型墳丘墓の性格の解明のために、青銅器祭祀および大型墳丘墓を盛行させた社会的要因と、それぞれの中での首長のあり方を比較検討して質的異同を検討し、首長の出現と権限の強化、一定範囲の政治的統合体形成の背景・基盤にも言及したい。

C.集団墓被葬者の絞込み—有力集団・首長層の出現—と墳丘墓:時間的変遷

墳丘墓被葬者の絞込み過程に対して、1980年代前半まで、弥生時代の終末をもって「共同体」の解体は終了し、首長の単体埋葬が一般化して古墳時代にいたる、という図式が有力であった。従来の諸説は、集団墓地内に線引きして墓群をまとめたうえで、その群を「共同体」「世帯共同体」「特定集団」あるいは「家族」などと評価するが、墓群の線引きはえてして恣意的で研究者によって異なるうえ(山口県土井が浜遺跡・佐賀県宇木汲田遺跡などで諸説を比較すると明らかである)、評価もそのままでは作業仮説に留まる。しかし検証はされず、実質的にはブラックボックスに入れるのと同じことであった。

これに対して、田中良之氏は、古人骨の歯冠計測値による親族関係分析に基づいて集団構造の変化を追究し、弥生時代の集団墓地の被葬者集団が、次第に絞込まれていく実態を解明した(田中2000・2004)。田中説では、墓地内の人骨間の血縁関係の有無と遠近を推定し、それによって血縁関係にある者の性構成・世代構成・分布から、今後居住規模・親族関係とその変化を推定した。

北部九州地方に関する成果を引用すると、前期～中期前半における人口増が、母村からの「クラン」の分節を実態とする集団の拡散を引き起こし、領域内での人口増・人口密度上昇から領域内に部族が増加し、この時期に盛行する列状墓の列は、「クラン」や「半族」などの親族集団であって、家族などの小単位の集合ではない。大規模墓地の一郭に出現する墳丘墓・区画墓の被葬者は、いくつかの「クラン」から選抜された人物(男主体・指導層)であり、有力な「クラン」「サブクラン」「リネージ」「家族」などではなく、「クラン」を束ねる部族的結合を示す。

中期後半に出現する前漢鏡などの青銅器を多数副葬する厚葬墓は「有力クラン内の有力層の墓地」であり、「クラン」間の序列化や「クラン」内の階層化、および「部族の族長」から「首長」への転化が進みつつあったことを示す。後期に入ると、統合規模の拡大と並行して階層分化がさらに進展し、「有力クラン」から「有力家族集団」、さらにその中から同一世代の1～3人ほど(男女キョウダイのペアを含む)に絞込み動きが生じ、前期古墳と同じ構成に落ち着いて行く。

ただし弥生時代における到達点については、著書(田中1995)以後に田中氏の認識の変化があり、前期古墳の被葬者が「家族」でなく「親族」であったり、一見単体埋葬の古墳でも、周囲に親族集団の墓域を伴ったりする事例があることから、個人や家族が析出しきれてはならず、絞込みの動きは古墳時代前期まで継続するとみる(田中2004)。前方後円墳における墳丘併葬あるいは墳丘の周囲に多数の埋葬施設を伴う事例について、首長の親族・一族・同族説が既にあるが(近藤1983)、それを敷衍化するものと言えよう(注1)。

田中説が画期的な点は、従来の諸説が集団墓の中に数基の纏まり(方形周溝墓や区画墓ならば1基あたりの被葬者群)を見出すと、無条件に家族・世帯あるいは大家族・世帯共同体と断じて疑わず、そこに副葬品があれば有力家族の顕在化などと意味づけ、そういうものの出現を少しでも古く溯上させようとする(弥生前期あるいは縄文時代からとする説も登場)の

に対し、親族集団・出自集団やその細分単位の顕在化は後期に降ることを人骨間の血縁関係という物証をもとに明らかにした点である。さらに、従来漠然と「階層分化の進行」と言われていた事象の実態が、出自集団間あるいは内で進行し、しだいに有力出自集団内の有力分節、さらにはその中での選択という形で進行したとの指摘も重要である。

田中氏の研究と並行して、近年精力的に墓地類型を設定し、それぞれの評価を提示する溝口孝司氏の仕事(溝口1998・1999a・1999b)は、なぜか田中説への言及が少ないが、田中氏による親族関係の究明で裏打ちされなければ、他より有効なモデルたりえない(他モデルとの優劣を決めたい)のは言うまでもない(注2)。

ここでは田中モデルを継承しつつ墳丘墓の出現を跡付ける。

D. 墳丘墓・区画墓の分類(第1図)

弥生時代の墳丘あるいは溝による区画を有す墳墓の名称は、「墳丘墓」「区画墓」「台状墓」「方形周溝墓」などがあるが、いずれも外部の形態的要素の表現であって、内的構成を含意した名称ではない。被葬者の数と構成が重要なので、そこに留意し田中説(田中2000・2004)に拠りつつ、これらの墓を以下の型に分類し、上記の形態名と併用する。

- ① **複数クラン代表者選抜型**：佐賀県吉野ヶ里墳丘墓や福岡県隈西小田区画墓に代表され、北部九州では中期前～中葉に多い。
- ② **特定クラン有力層抽出型**：福岡県前原市三雲南小路、春日市須玖岡本D地点、飯塚市立岩堀田、夜須町東小田峯、佐賀県神埼町二塚山、大分県日田市吹上などの厚葬墓に代表され、北部九州では中期後半に出現する。
- ③ **絞り込み顕在型**：「特定クラン有力層抽出型」からさらに絞り込みが進行した型で、有力サブクランあるいは有力リネージが顕在化している。後期に入って統合規模の拡大と並行して階層分化がさらに進展した結果であるが、「有力家族」や同一世代の1～3人ほどに絞り込む動きも始まっている。北部九州以外の地域では人骨が残らず、血縁関係が不明の場合が多いため、墓坑のあり方から以下のように分類する。

複数群在型 墓坑が10基前後以上と多く群在する。

複数同格型 墓坑が数基あり、互いの格差が明瞭でない。

複数格差型 墓坑が数基あり、中心主体と周辺主体の墓坑規模や副葬品での格差が顕在化している。

並列型 墓坑が2基並存する。

単数型 墓坑が1基のみ。

なお、単数型は墓の中央に一人が埋葬される型であるが、これと似て非なる型があり区別する必要がある。当該地域の墓の変遷史の中で、被葬者が次第に絞り込まれ最後に単数になった**絞り込み単数型**と、東日本の方形周溝墓のように当初から単数埋葬が一般的であった**非絞り込み単数型**である。墓を単独で見ると必ずしも区別できないが、両者は質が異なるので、概念上は区別しておく必要がある。

II 墳丘墓の展開－地域別概観－

吉野ヶ里墳丘墓に代表される複数クラン代表者選抜型墳丘墓は前期末から存在するが、小稿では扱わず、弥生時代後期および終末期(庄内式期およびその併行期)における、絞り込み顕在型墳丘墓の出現と展開の様相を地域別に概観する。地域は便宜的に律令期の「国」あるいは「国」を幾つかまとめた単位とするが、諸般の事情から、いくつかの

「国」を扱えなかった。

時期の細分は、各地域における墳丘墓の動向の大枠を把握する目的に合わせて、後期および終末期を二分ないし三分するに留めた。なお、弥生中期と後期の境界線が、土器編年の大別基準の相違から、九州と中国・四国以東とで一致していないが、本文中における「中期」「後期」は、九州・中国四国以東それぞれでの用法を踏襲し、併行関係については、九州の後期前葉後半が中国・四国以東の後期初頭に当たると考えておく。なお、遺跡所在地の市町村名は、近年の大合併前の旧名とした。

A. 北部九州

中期後半には福岡県前原市三雲南小路、春日市須玖岡本D地点、飯塚市立岩堀田、夜須町東小田峯、佐賀県神埼町二塚山、大分県日田市吹上などに特定クラン有力層抽出型の厚墓葬があり、一部は墳丘墓の可能性もあるが、後期前半に入ると、周知のように墓地・集落ともに数が減り、特定クラン有力層抽出型は、前半から中葉にかけての佐賀県唐津市桜馬場、福岡県前原市井原鍵溝に可能性があるものの、他は知られていない。

〔筑前〕後期後葉に入ると、絞り込み顕在型が出現し、複数同格型の前原市三雲寺口Ⅱ-17区画墓、福岡市飯氏Ⅱ区方形区画墓、複数格差型の前原市平原1号方形墳丘墓（方格規矩四神鏡・内行花文鏡・魼龍文鏡・超大型内行花文鏡計40枚）、終末期前半に複数格差型の福岡市宮の前C地点突出付方形墳丘墓、終末期後半に型不明の福岡市比恵36次SD01方形（前方後方形説有り）墳丘墓がある。後期後半から終末期の可能性のあるものとして、複数同格型の福岡県粕屋町酒殿墳墓（墳形不明、獣首鏡）、複数格差型の福岡県粕屋町平塚円形墳丘墓（舶載内行花文鏡）、志免町亀山方形（推定）墳丘墓、単数型の福岡市名子道2号隅丸方形墳丘墓がある。

中国・四国地方以東と異なり墳丘墓は少なく、形態もばらつき優勢なタイプがない。中国鏡、鉄製武器・工具の副葬は続くが、1ヶ所の多量副葬は平原1号に限られ、しかも後期前半以前と比して遠賀川流域以東への流出が目立つ。

〔筑後・肥前〕前方後円形墳丘墓は、終末期後半に単数型の吉野ヶ里町西一本杉ST008、型不明の小郡市津古2号、前方後方形墳丘墓は、終末期後半に鳥栖市赤坂、吉野ヶ里町吉野ヶ里ST942がある。吉野ヶ里ST2200・ST941・ST568はいずれも古墳時代に下る。

B. 東部九州

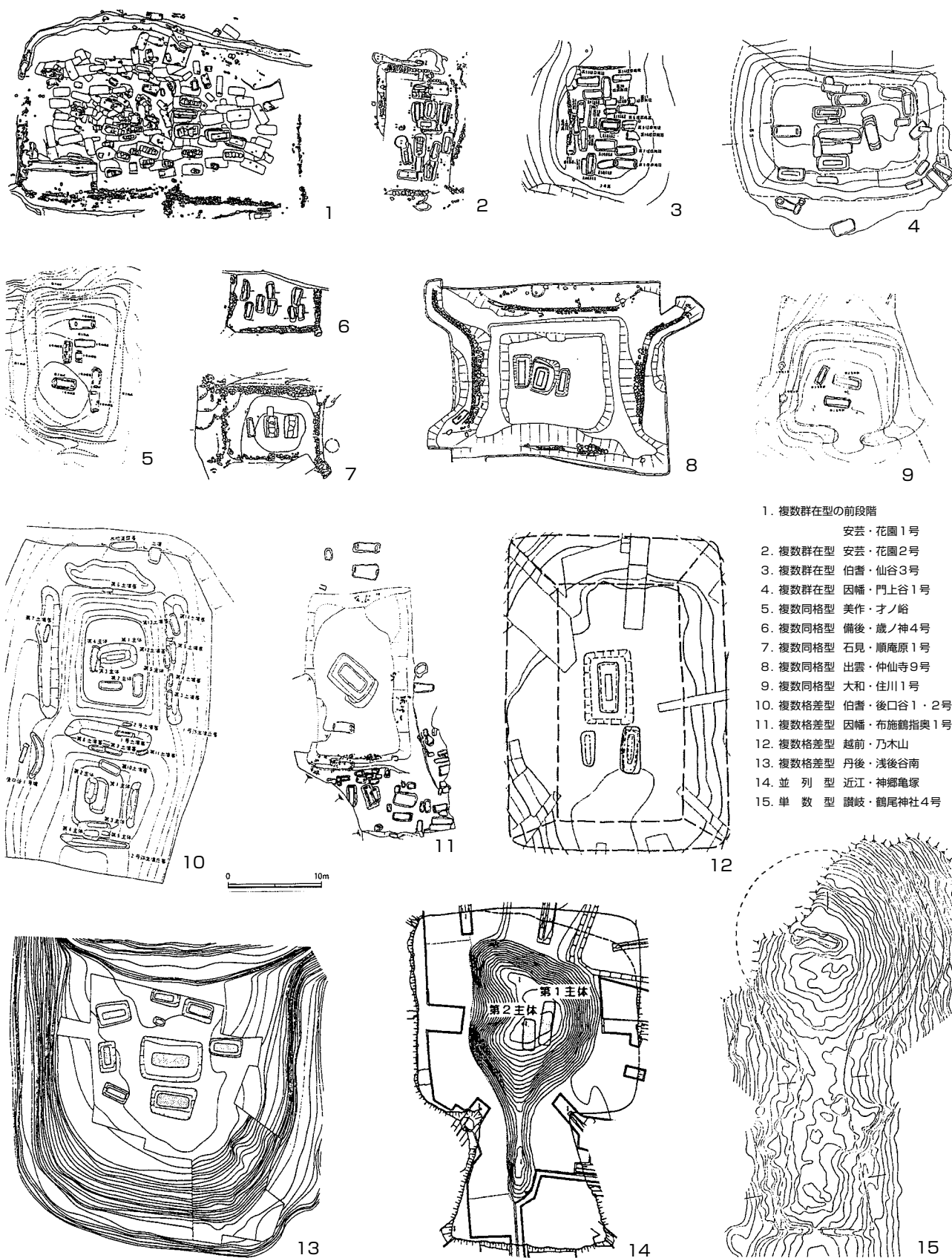
〔豊前〕後期までと異なり、終末期ににわかに墳丘墓と鏡の副葬が顕在化する。方形墳丘墓として、終末期前半に、複数群在型の福岡県行橋市下稗田H地区（周溝墓）、豊津町徳永川ノ上3号、複数同格型の行橋市竹並A-10号、並列型の福岡県北九州山崎八ヶ尻（下層）、終末期後半に複数格差型の豊津町徳永川ノ上V号、宇佐市川部南西地区1号（周溝墓）がある。円形墳丘墓として、終末期後半に、複数同格型の北九州市郷谷C地点（四禽文鏡）、豊津町徳永川ノ上4号（舶載内行花文鏡）がある。

後期後半から終末期の可能性のあるものとして、複数同格型の福岡県田川市夫婦塚方形墳丘墓（内行花文鏡）、福岡県香春町採銅所宮原墳墓（墳形不明、舶載内行花文鏡・小型仿製鏡）がある。

C. 四国

四国北部では、後期に墓地が平野を見下ろす丘陵状に移動し、被葬者が絞り込まれた木棺墓・土坑墓・石棺墓などの小群集となると言われてきたが、近年の調査で平野部の円形・方形周溝墓が増えてきた（正岡2005）。讃岐・阿波では後期後葉～終末期に、円形に細長い突出部を付けた墳丘墓と竪穴式石槨が出現し中国鏡が副葬される。播磨とともに前方後円墳の構成要素の発祥地である。

〔伊予〕後期の様相は不明な点が多く、松山市若草町遺跡円形・方形周溝墓13基、並列型の松山市朝日谷2号前方後円墳、型不明の小松町大久保1号前方後円形墳なども古墳時代初頭に下るようだ。



第1図 絞り込み顕在型墳丘墓の分類(1/600)

讃岐 後期に入ると平野部の低墳丘墓(周溝墓)が多くなり、墳形には方形・円形・突出部付きが揃う。丘陵上の墳丘墓も増え、石槨・中国鏡を持つものが目立ち、被葬者は終始1～2名が主である。

平野部では、**円形周溝墓**は、後期前葉に**複数格差型**の高松市空港跡地ST010、後期後半に**複数格差型**の長尾町陵ST02、**突出部付き円形墳丘墓**は、後期後半に**型不明**の高松市林・坊城SX03(突出2ヶ所)、終末期後半に**複数格差型**のさぬき市森広ST301・ST302、**前方後円形墳丘墓**は、終末期～古墳時代前期初頭に高松市空港跡地ST01、**方形周溝墓**は、後期中葉に**型不明**の東かがわ市成重6・7、**前方後方形墳丘墓**は、終末期～古墳時代前期初頭に**型不明**の高松市空港跡地ST05がある。

丘陵上では、**円形墳丘墓**は、後期初頭に**型不明**の高松市鶴尾神社5号、後期末～終末期初頭に**複数格差型**の寒川町奥11号(突出部付き?、石槨)、終末期後半に**複数格差型**の綾歌町石塚山2号(石槨、石囲い木槨説有り)、東かがわ市樋端(石槨)、**突出部付き円形墳丘墓**は、後期前葉頃に**複数群在型**の綾歌町平尾2号、後期後葉に**型不明**の長尾町尾崎西ST24、**前方後円形墳丘墓**は、終末期末に**単数型**の高松市鶴尾神社4号(方格規矩四神鏡・石槨)、**方形墳丘墓**は、後期末～終末期初頭に奥10号(石槨)、終末期～古墳時代初頭に**複数格差型**の寒川町極楽寺1号がある。

前方後円形の長尾町丸井(画文帯環状乳神獸鏡)、高松市石清尾山9号(単数型)、**双方中円形**の石清尾山猫塚(複数型)、石清尾山鏡塚は、鶴尾神社4号に後続する時期であり古墳時代であろう。なお、**複数格差型**の綾歌町平尾3号突出部付き円形墳丘墓(石槨)は、中期末～後期初頭、後期後半～古墳時代前期の二つの可能性が考えられている。

阿波 墳丘墓の顕在化は讃岐より遅れる。**円形墳丘墓**は、後期末に**複数格差型**の徳島市延命ST2012(突出部付き?)墳丘墓(石槨)、終末期末～古墳時代初頭に**単数型**の鳴門市西山谷2号(斜縁獣帯鏡・石槨)がある。**突出部付き円形墳丘墓**は、終末期前半に**単数型**の鳴門市萩原1号(画文帯同向式神獸鏡・石囲い木槨)、終末期前半に三好町・足代東原B—1号がある。

D.山 陽

備前・備中 平地の方形周溝墓はほとんどなく、後期中葉まで集団墓は丘陵や尾根上の土坑墓・木棺墓の群集であり低墳丘を伴うものもあった。後期前葉～中葉に、郭の規模や朱の使用量で墳丘墓間の格差が生じ始め(宇垣1999)、後期後葉に至って大型墳丘墓が出現し、墳丘墓間の格差、墳丘墓被葬者と一般集団成員との格差が明瞭に示されるに至った(注3)。方形墳が主流であるが、わずかに円形墳が混じる。

中期後葉では、**複数群在型**の山陽町四辻墳丘墓、**複数同格型**の山陽町四辻峠墳丘墓は、木棺墓群を覆う低墳丘が推定できるが、重複して古墳が築かれたため本来の墳形は不明である。

方形墳丘墓は、後期前葉に、**複数群在型**の御津町みそのお6～12・16～18号、**複数同格型**の山陽町宮山、後期中葉に、**複数群在型**の御津町みそのお19・21～28号、**複数格差型**の総社市伊予部山(石槨)、後期後葉に、**複数群在型**の御津町みそのお29～32・47号、清音村鋳物師谷2号(石槨)、**複数同格型**の岡山市雲山鳥打1号(木槨)、清音村鋳物師谷1号(石蓋石槨・虺龍文鏡)、**複数型**の真備町黒宮大塚「後方部」(墓坑数不明・木蓋石槨)がある。

終末期前半に、**複数同格型**の御津町みそのお20・33～37号、**複数格差型**の岡山市都月坂2号(石蓋石槨)、**複数型**の倉敷市鯉喰神社(墓坑数不明・竪穴式石槨2基+a・向木見型)、**単数型**の井原市金敷寺裏山(石蓋石槨・向木見型)、倉敷市女男岩、終末期後半に、**複数同格型**の御津町みそのお38・39・40・41・42号、**複数格差型**の岡山市郷境3号、**並列型**の総社市殿山13～15号、**単数型**の岡山市郷境1号・2号がある。

突出部付き円形墳丘墓は、後期後葉に、**複数群在型**の総社市立坂(双方中円ないし前方後円の可能性有り・木槨)、**複数格差型**の倉敷市桶築**双方中円形墳丘墓**(木槨)がある。なお、古墳時代初頭には前方後円形墳丘が出現する。**複数格差型**の総社市宮山(飛禽鏡・石槨)、**単数型**の岡山市矢藤治山(方格規矩鏡・石槨)であり、宮山型・矢藤治山型特殊器台の存在から古墳時代初頭に置いたが、大和での前方後円墳出現との時間的前後関係は微妙である。いずれにせよ突出部付き円形墳丘墓の出現は当地が早く、播磨(西条52号・養久山1号)・阿波(萩原1号)・讃岐(鶴尾神社4号)が続く。大和

の纏向型の諸例(石塚・勝山・矢塚)はこれらと関係する可能性がある。また当地は円筒埴輪の起源地であり、竪穴式石槨の有力起源地の一つである。

美作 後期前半に複数群在型の鏡野町竹田8号四隅突出型墳丘墓、複数同格型の津山市下道山1号・2号方形墳丘墓、津山市オノ峪方形墳丘墓、津山市三毛ヶ池上層円形墳丘墓がある。

播磨 前期以来の低地の方形墳丘墓(周溝墓)は東播磨に多く西播磨まで達するが後期に減り、終末期に丘陵上に上がる。備前以西と異なり、中期～後期まで平地の円形墳丘墓(周溝墓)の分布中心地だったが終末期に減り、入れ替わりに丘陵上の円形墳丘墓が発達する。後期～終末期に、特に揖保川下流域で、円形に細長い突出部を付けた墳丘墓と竪穴式石槨が出現し中国鏡が副葬される。讃岐・阿波とともに前方後円墳の構成要素の発祥地である。なお播磨・讃岐・阿波には、石槨や木槨の石囲いや積石塚が共通に見られる。

方形墳丘墓は、後期に複数格差型の佐用町西ノ土居長方形墳丘墓(船載内行花文鏡・石槨)、終末期後半に複数格差型の上郡町井の端7号方形墳丘墓(石槨)がある。

突出部付方形墳丘墓は、後期前半に型不明の龍野市小神辻の堂、終末期前半に複数格差型の揖保川町養久山5号中方双方形墳丘墓(石槨)がある。

円形墳丘墓は、中期末～終末期に複数群在型の揖保川町養久山32号(石槨)、後期後葉に複数同格型の揖保川町半田山1号(小型仿製鏡)、半田山2号、型不明の龍野市北山(周溝墓)、終末期前半に複数格差型の揖保川町養久山12号、終末期後半に複数格差型の御津町綾部山39号(石槨・画文帯神獸鏡)、後期後葉から終末期の可能性のあるものとして、並列型の龍野市白鷺山(船載内行花文鏡・小型仿製鏡)、単数型(?)の御津町岩見北山1号(船載内行花文鏡・石槨)、終末期から古墳時代初頭に複数格差型のたつの市南山1号(石槨)がある。単数型の神戸市西神ニュータウン30-1号円形墳丘墓(木槨)は後期後半～終末期の可能性はある。

突出部付き円形墳丘墓は、後期前半に型不明の赤穂市有年原・田中1号(特殊器台)、後期末～終末期に複数格差型の揖保川町養久山40号(石槨)・42号、終末期前半に単数型の加古川市西条52号(船載内行花文鏡・石槨)、終末期後半に複数格差型の姫路市山戸4号(石槨)がある。複数格差型の揖保川町養久山1号(四獣鏡・石槨)が終末期から古墳時代初頭かは微妙である。

E.近畿中部(畿内)

前期以来、平野部に営まれる方形墳丘墓(周溝墓)が主流で、後期に丘陵上の墳丘墓が出現するが少ない。円形墳丘墓(周溝墓)が摂津に多く、河内・和泉・大和に及ぶ。

摂津 後期に方形周溝墓が減り、丘陵上の方形墳丘墓が出現する。中期後葉以降、播磨から伝播した円形周溝墓が多く、終末期には近江と並ぶ分布の中心地となる。

方形墳丘墓は、終末期に並列型の神戸市天王山4号(八禽鏡)、円形墳丘墓(周溝墓)は、後期後半に型不明の伊丹市口酒井1、無番(7・9次調査)、尼崎市松ヶ内ST01・ST1、尼崎市古宮2、後期に型不明の神戸市郡家(城の前)ST01・ST02・6次1・6次2、後期末～終末期初頭に型不明の豊中市服部2～4号、終末期前半に単数型で群在する神戸市深江北町、終末期に型不明で群在する豊中市豊島北1号～5号、型不明の神戸市魚崎中町SX1・SX2、型不明の三田市川除・藤の木SX01・02、型不明で単独の茨木市郡がある。突出部付き円形墳丘墓(周溝墓)は、後期後葉に型不明の茨木市総持寺1号、後期末～終末期初頭に型不明の豊中市服部1号がある。

河内・和泉 前期以来、平野部の方形墳丘墓(周溝墓)が主流であるが、後期～終末期に少数の円形墳丘墓(周溝墓)が出現する。東瀬戸内の影響と見られる(小山田1994)。日常土器の様相では、終末期における中河内と吉備の関係が深く(秋山2006)、河内と大和の関係は薄い、終末期末から古墳時代初頭の葬送用土器では大和と吉備の関係が密接となる。

円形墳丘墓(周溝墓)は、後期に型不明の岸和田市下池田1～3、終末期に型不明で単独の八尾市成法寺SX1(推

定)がある。突出部付き円形墳丘墓(周溝墓)には、後期前半に型不明の和泉市府中SX05、後期に型不明の岸和田市下池田SD001がある。纏向石塚をこれら平野部の円形墳丘墓の系譜と見る説(小山田1994)がある。突出部付き方形墳丘墓(周溝墓)は、後期前半に型不明の和泉市府中SX03がある。前方後方形墳丘墓(周溝墓)には、終末期初頭に単数型の八尾市久宝寺南地区南群1号、終末期末～古墳時代初頭に型不明の大阪市加美14号がある。

終末期に丘陵上の墳丘墓が出現する。終末期(推定)に単数型の枚方市中宮ドンパ1号突出部付方形墳丘墓、単数型の枚方市鷹塚山円形墳丘墓がある。

大 和 前期以来、平野部の方形周溝墓が主流で、後期まで他地域のような大型化、特殊化を遂げた墳丘墓はほとんどない。終末期に突出部付き円形墳丘が登場するのは、中・東部瀬戸内地域(寺沢2002)ないし近江の影響と見られる。終末期に奈良盆地東方山中の宇陀郡で丘陵上の方形墳丘墓(台状墓)が特殊に発達する。これを宇陀川・名張川・木津川・淀川を介した河内・山城方面の「台状墓」の影響と見る説(清水2003)がある。

方形墳丘墓は、後期後半に型不明の天理市別所裏山、終末期初頭に複数同格型の榛原町キトラ、終末期後半に単数型の榛原町大王山9地点(前方後方形説あり)、単数型ないし並列型の榛原町能峠南山1号～8号、菟田野町見田大沢4号(四獣鏡)・5号、終末期後半～古墳時代初頭に並列型の菟田野町蓮華山、終末期に単数型の宇陀町平尾東6号・7号がある。

突出部付き方形ないし前方後方形墳丘墓は、後期に並列型の広陵町黒石10号突出部付き方形、終末期後半に型不明の桜井市メクリ1号前方後方形、終末期に型不明の当麻町太田1(突出部付き方形・周溝墓)、終末期～古墳時代初頭に複数同格型の五条市住川1号突出部付き方形、型不明の菟田野町見田大沢1号突出部付き方形がある。

円形墳丘墓は、終末期に型不明の田原本町十六面薬王寺SD101(周溝墓)がある。

前方後円形墳丘墓は、終末期末～古墳時代初頭に、複数格差型の桜井市ホケノ山(画文帯同向式神獸鏡・半肉彫神獸鏡・内行花文鏡、石囲い木槨)、型不明の桜井市纏向石塚、桜井市矢塚、桜井市勝山がある。これら「纏向型」のうち、ホケノ山については壺形土器から終末期説がある一方で、小型丸底土器が布留式に酷似すると報告されすっきりしない。他についても終末期に上るか古墳時代初頭に下るか未確定である。纏向型の出現が終末期に上るのなら、それに先行して突出部付き円形墳丘墓が出現していた吉備(楯築)、播磨(養久山5号・1号)・阿波(萩原1号)・讃岐(鶴尾神社4号)の影響があったと見られるが、石塚・勝山・矢塚には葺石がなく、ホケノ山を含めていずれにも特殊器台は無い。葺石・石垣・木槨をもつホケノ山への影響元については、筑紫・出雲・吉備説(寺沢2002)、主として丹後・但馬・近江説(福島2003)、阿波・讃岐説(石野2004)が対立する。

山 城 後期に方形周溝墓が減り、丘陵上の方形墳丘墓が出現する。方形墳丘墓は、後期前半に複数群在型の木津町木津城山1・2(獣帯鏡)、型不明の京田辺市興戸5号、前方後方形墳丘墓は、終末期後半に単数型の城陽市芝ヶ原12号(四獣形鏡)、円形墳丘墓は、終末期に複数格差型の加茂町砂原山がある。これらは木津川・淀川を介して河内方面の「台状墓」と関係する可能性がある(清水2003)。

F. 近畿東部

近 江 弥生時代を通じて平野部では方形周溝墓が主流だが、後期に出現した突出部付き方形墳丘墓、終末期から見られる前方後方形墳丘墓が終末期後半に増加し、古墳時代前期には前方後方墳が多く見られることから、近畿の中・南部地域と異なり、東海や北陸との関係が深かったと言える。前方後方形墳丘墓はほとんどが周濠をもつ低墳丘墓で、墳丘が削平され墓坑数が不明のものが多く。特に野洲川流域に集中的に分布する。前方後方形墳丘墓の起源については、近畿北部の方形墳丘墓からの自生説(植田2004)がある。東日本における終末期後半以降の前方後方形周溝墓の拡散、あるいは古墳時代前期の前方後方墳の拡散の起点が近江(森岡2001)か東海(赤塚1992・1995・1996)か双方(植田2001・2004)か説が割れている。双方説では近江→北陸、濃尾→関東の波及を考える。

琵琶湖東岸では、突出部付き方形墳丘墓は、後期の栗東町縄SX-1・SX-5、終末期後半の守山市益須寺1号・3号、

守山市横江SX-3(平地)、栗東町高野SX-1がある。

前方後方形墳丘墓は、終末期前半には、近江町法勝寺SDX23(平地)、能登川町神郷亀塚(並列型、木棺を板材で方形に囲む、平地)、終末期後半には、高月町小松(古保利B-6号、丘陵上、舶載方格規矩鏡・四葉座連弧文鏡)、近江八幡市浅小井高木SX01(平地)、守山市経田SX-3(平地)がある。

一方、讃岐・播磨・摂津と共通する円形墳丘墓が終末期に突如出現し、型不明の野洲町小篠原SX01・SX05・SX06がある。突出部付き円形墳丘墓は、終末期前半の虎姫町五村、長浜市大茂亥・鴨田SX01、終末期後半の近江町西円寺1号は、円形墳丘墓としては大型である。

琵琶湖西岸では、後期後半に新旭町熊野本貼り石方形墳丘墓(単数型か、丘陵上)、終末期の可能性のある前方後方形墳丘墓として新旭町熊野本6号(丘陵上)、熊野本12号(丘陵上)がある。

G.山 陰

石見から丹後にかけて中期中葉～後葉に貼り石方形墳丘墓が分布し、それを祖形に四隅突出型墳丘墓が成立する。四隅突出型は出雲→伯耆→因幡の順で減り、伯耆→因幡の順で方形墳丘墓が多くなる。但馬・丹後・丹波の近畿北部に多い「台状墓」(丘陵尾根を覆う階段状平坦面を持つ墳墓)が因幡に若干及ぶ。

石見 貼り石方形墳丘墓は、中期中葉に複数同格型の江津市波来浜A区2号、後期前葉に複数同格型の波来浜B区1号、四隅突出型墳丘墓は、後期中葉に複数同格型の邑南町順庵原1号がある。

出雲 貼り石方形墳丘墓は、中期中葉に単数型の宍道町三成2号、型不明の出雲市中野美保2号、中期後葉に複数同格型の松江市友田B区1号・2号、単数型の松江市友田B区3号・5号、終末期前半に複数同格型の安来市鍵尾A区がある。方形墳丘墓は、後期後葉に複数同格型の安来市臼コクリ1号・2号、終末期後半に単数型の松江市客山1号がある。

四隅突出型墳丘墓は、中期後葉に最古型式が登場し(出雲市青木4号)、後期前葉にもあるものの中葉までは少なく、後期後葉・終末期に激増する。変化の方向は、裾部列石の複雑化と突出部の肥大化である。かつては備後三次盆地が四隅突出型墳丘墓発祥地と考えられていたが、青木4号は三次盆地の最古型式と隅の処理法が同じで、中期中葉～後葉に日本海沿岸域で発達した貼り石方形墳丘墓から四隅突出型墳丘墓が成立した可能性が強まっている(桑原2005)。四隅突出型墳丘墓は、後期前葉に型不明の松江市友田、後期後葉に複数同格型の玉湯町布志名大谷Ⅲ1号・2号、松江市来美1号、安来市仲仙寺9号、複数格差型の出雲市西谷3号(木槨)、隠岐郡西郷町大城1号、安来市仲仙寺10号、終末期後半に複数同格型の東出雲町大木権現山1号、複数格差型の安来市安養寺1号(木槨)、単数型の安来市宮山4号、松江市間内越1号がある。西谷2号(後期後半)・西谷6号(終末期)は複数型だが同格型か格差型か不明である。

出雲で後期後葉以降に四隅突出型墳丘墓が集中する能義平野と斐川平野では、四隅突出型墳丘墓が従前の集団墓から飛び出す形で墳丘墓の隔絶化が進行した(松井1999)。

備後北部・安芸北部 江の川上流域は国別では備後・安芸だが、出雲と関係が深くここで触れておく。中期後葉に最古型式の四隅突出型墳丘墓が登場し、出雲市青木遺跡の発見までは四隅突出型墳丘墓発祥の地と考えられていた。以後、後期前葉までは四隅突出型墳丘墓が多く、中葉以降に減る。中期後葉に複数同格型の三次市陣山、三次市宗祐池西1号、三次市殿山38号(墓坑数不明)、後期前葉に複数格差型の庄原市佐田谷1号(木槨)、単数型の庄原市田尻山1号、後期中葉に複数同格型の千代田町歳ノ神3号・4号、終末期後半に複数格差型の三次市矢谷1号がある。矢谷1号は前方後方形の6隅が突出したもので、向木見型の特種器台・特種壺をもつ。

貼石方形墳丘墓は、後期前半に複数群在型の三次市花園2号がある、花園2号ほど絞り込まれていない状況を示すのが、花園1号でその墓坑数は300を超える。方形墳丘墓は、後期前半に複数同格型の千代田町中出勝負峠3号、終末期末～古墳時代初頭に複数格差型の千代田町中出勝負峠8号突出部付き方形(内行花文昭明鏡・内行花文鏡)がある。

伯耆 後期前葉から中葉まで四隅突出型墳丘墓が多いが、後葉以降に方形墳丘墓が多くなる。

貼り石方形墳丘墓は、後期初頭に大山町洞ノ原2号(墓坑数不明)、後期中葉に大山町仙谷3号(複数群在型)がある。東伯耆では中期中葉まで墳丘墓の周囲に木棺墓群が形成されるが、それ以降木棺墓群を排除する形で墳丘墓の隔絶化が進行した(松井1999)。

四隅突出型墳丘墓は、出雲と異なり、後期前葉・中葉に多く後葉以降減る。後期前葉に複数格差型の大山町洞ノ原1号(墓坑数不明)、型不明の米子市尾高浅山1号、後期中葉に複数同格型の米子市日下1号、大山町仙谷2号、複数格差型の倉吉市阿弥大寺1号のほか、型不明の倉吉市柴栗・大山町仙谷1号があり、後期後葉に複数同格型の東郷町宮内雲山1号、型不明の倉吉市阿弥大寺2号・3号、終末期後半に大山町徳楽(墓坑数不明)、倉吉市藤和(墓坑数不明)がある。

方形墳丘墓は、後期中葉に並列型の大山町仙谷5号、型不明の東郷町宮内雲山2号、後期後葉に複数同格型の琴浦町湯坂1号、複数格差型の東郷町宮内雲山3号、倉吉市後口谷1号・2号、終末期前半に複数同格型の淀江町松尾頭2号、単数型の淀江町松尾頭1号、終末期後半に複数同格型の倉吉市二夕子塚、東伯町井岡地中ソネ、型不明の倉吉市三度舞大將塚がある。円形周溝墓は終末期前半に複数群在型の倉吉市泰久寺がある。

因幡 後期には方形墳丘墓が多く、四隅突出型墳丘墓や、但馬・丹後・丹波に多い「台状墓」は少ない。後期中頃に複数格差型が出現し、副葬品に鉄製武器・ガラス玉も見られるが、丹後ほど量は多くなく、中心主体と周辺主体で副葬品の量に大差はない(谷口2004)。東伯耆と同様に中期中葉まで墳丘墓の周囲に木棺墓群が形成されるが、それ以降木棺墓群を排除する形で墳丘墓の隔絶化が進行した(松井1999)。

貼り石方形墳丘墓は、後期初頭に複数同格型の岩美町新井三嶋谷1号、後期中頃に複数格差型の鳥取市布施鶴指奥1号、後期後葉に並列型の鳥取市桂見、型不明の西桂見がある。布施鶴指奥1号は、中心墓坑が大きく木槨内の箱形木棺に多量の水銀朱が敷かれており、墳丘の周囲に多数の土坑墓が群れをなす。西桂見は墳丘斜面貼り石に四隅突出墳丘墓の影響がうかがわれるが、墳形自体は方形らしい(谷口2004)。

四隅突出型墳丘墓は、終末期後半に複数格差型の国府町糸谷1号がある。

方形墳丘墓は、後期前葉に複数同格型の鳥取市滝山猿懸平2号、後期中頃に複数同格型の郡家町下坂1号、後期後葉に鳥取市服部1号・服部3号、複数群在型の鳥取市紙子谷門上谷1号、後期末に複数群在型の鳥取市紙子谷門上谷2号、終末期前半に複数格差型の鳥取市西桂見2号・3号、終末期末に単数型の鳥取市桂見1号がある。桂見1号は墳丘上では単数だが、墳裾に4基の土坑墓がある。

H.近畿北部

おそらくは可耕地の狭小に起因する墓地の丘陵地への移動と「台状墓」(丘陵尾根を覆う階段状平坦面を持つ墳墓)の発達がこの地域の特徴である。「台状墓」は、丹後に典型的に発達するので、まず丹後の様相を記述し、その影響が及んだ但馬・丹波(但馬考古学研究会・河丹考古学研究会2001・2004)を続ける。なお「台状墓」には尾根を削り出し盛土が無い例もあるが墳丘墓に含めておく。

丹後 中期後葉に方形周溝墓・貼り石方形墳丘墓が登場する。方形周溝墓には、複数同格型の弥栄町奈具、峰山町カジャ、貼り石方形墳丘墓には、大宮町小池13号、複数格差型の野田川町寺岡SX56、単数型の加悦町日吉ヶ丘があるが、この単数型は絞込み単数型ではなく、中期以前の方形周溝墓に一般的な非絞込み単数型と見るべきであろう。他に中期後葉に型不明の岩滝町千原1号・2号、京丹後市(弥栄町)奈具岡1号・2号がある。

方形の墳丘墓(台状墓)は中期後葉に本格的に出現し後期に盛行する。

後期初頭～前葉には、大宮町左坂G支群西丘陵、複数格差型の大宮町左坂G支群南丘陵、大宮町三坂神社がある。後期前葉～中葉の丹後町大山は、墳頂部は単数型だが、周囲に墓坑を群在させるので、全体では複数格差型である。後期中葉には複数格差型の岩滝町大風呂南1号、後期後葉には、複数同格型の大宮町帯城A地区、複数格差型

の大宮町帯城B地区、網野町浅後谷南、峰山町金谷1号、峰山町赤坂今井、野田川町西谷3号・4号、終末期(庄内式並行期)には、**複数格差型**の加悦町内和田5号がある。

終末期には方形の台状墓・墳丘墓以外の墳形が出現し、古段階に**複数型**の加悦町白米山北**楕円形墳丘墓**がある。

中期までは一つの墓に葬られる墓坑数が少ないが、後期に墓坑数が増加する。後期末には墳裾にテラスをめぐらし、中心主体に大型の墓坑をもつ大型の台状墓(浅後谷南・赤坂今井・金谷1号)が出現する。

副葬品には、後期初頭から鉄製武器が出現し始め(素環頭鉄刀・三坂神社墳墓群3号墓第10主体部・左坂墳墓群26号墓第2主体部)、後期後葉～終末期に刀・剣・鏃・鉞などの鉄器やガラス製品が急増する。後期初頭の三坂神社3号墓、後期中葉の大風呂南1号、後期末の赤坂今井などは豊富な副葬品をもつが、他は少数の鏃・鉞+ガラス玉が普通で、限られた主体部には、鉄剣1点あるいはそれに小型鉄器ないしガラス玉が加わる例が多い。**複数格差型**の中心主体に鉄製武器、周辺埋葬にガラス玉という格差が生じる。

なお、古墳時代初頭に下るが、**複数格差型**の弥栄町・峰山町太田南5号方形墳丘墓(青龍三年銘方格規矩四神鏡)、続いて**単数型**の太田南2号方形墳丘墓(画文帯神獸鏡)があり、青龍三年銘方格規矩四神鏡は古墳時代前期の大阪府高槻市安満宮山古墳出土鏡と同範である。

また葬送儀礼として、中期後半に墓坑内破碎土器供献が出現し後期前半に一般化するが、終末期には墓坑上破碎土器供献に転換する。

但馬 中期には**非絞込み単数型**の方形周溝墓が一般的で、中期初頭の豊岡市駄坂舟隠方形周溝墓は例外的に山上にある。中期後葉に山東町栗鹿貼り石方形墳丘墓がある。

後期前半には木棺墓群が丘陵に上がり、豊岡市東山墳墓群では墓道の両側に2列に木棺墓が並び、鉄器(鏃・鉞)・ガラス玉の副葬や墓坑内破碎土器供献が始まる。後期中頃には**複数同格型**の豊岡市半坂周溝墓(山上の周溝墓)があり、副葬品に鉄剣が出現する。

後期後半に至って丹後と同様に「台状墓」主体となり、**複数格差型**の豊岡市妙楽寺、豊岡市立石などがある。丹後と同様に1主体あたり1本の鉄剣副葬が多い。

丹波 丹後のうち由良川流域は丹波に含めて記述する。由良川流域(丹波西部+丹後南部)では、中期には**非絞込み単数型**の方形周溝墓が一般的で、中期後葉に**複数同格型**の舞鶴市志高1号・3号貼り石方形墳丘墓がある。後期になると丹後と同様に「台状墓」主体となり、終末期(庄内式並行)前半に綾部市岩谷1号がある。終末期には「台状墓」に加えてふたたび低地の墳丘墓(周溝墓)が現われ、方形を基本としつつも、**円形墳丘墓**(周溝墓)には、**型不明**で群在する綾部市新庄1～6号(終末期後半)、**突出部付き方形墳丘墓**には**型不明**の綾部市青野西SX49(終末期後半)、**突出部付き円形墳丘墓**には**型不明**の青野西SX59(終末期後半以降)がある。

現在の兵庫県域(兵庫丹波)では、中期中葉から後葉の春日町七日市遺跡では、**非絞込み単数型**の方形墳丘墓(周溝墓)がある。この周溝墓では、中期中葉には**非絞込み単数型**が周溝を共有しつつ連続するが、中期後葉には周溝墓の数が減り、その周囲に木棺墓が群在するようになる点が重要である(多賀2004)。後期には**円形墳丘墓**(周溝墓)主体となり、**複数型**のSX03・09、**単数型**の仮2・仮5、**型不明**のSX01・SX02・SX04・仮3・仮4などがある。後期になると墳墓が丘陵に上がり「台状墓」となる。後期後半に**複数同格型**の青垣町ボラ山、後期末に**複数同格型**の篠山市黒田坪、終末期後半に**複数格差型**の篠山市ずえが谷(周溝あり)、篠山市内場山がある。このうち内場山は丹後の浅後谷南・赤坂今井・金谷1号に類似して墳裾にテラスを持ち、鉄器の副葬が多く、中心主体と周辺主体で副葬品の量に大差がある。

このほか丹波東南部の大堰川流域では、後期中葉に園部町狭間5号方形墳丘墓(木棺を板で方形に囲む)、終末期末に**単数型**の園部町黒田前方後円形墳丘墓(双頭龍文鏡・木槨)がある。

I. 北 陸

北陸では、後期に方形周溝墓が山上に上がるとともに方形墳丘墓が多くなる。後期後半に四隅突出型墳丘墓が越

前に伝わり山陰地方との関係が生じたことは確かだが、当地方の四隅突出型墳丘墓は、貼石が無い点で終始山陰と異なるうえに、終末期に加賀・越中に伝わると、方丘部分が正方形となり突出部が山陰以上に肥大する。しかし越前では後期後半以降に長方形墳丘墓が主流となる。

終末期末に突出部付き方形墳丘墓・前方後方形墳丘墓が出現し、古墳時代当初は前方後方墳が多く見られることから、この間は東海地方との関係が濃密であった(堀2004、高橋2005)、東海の影響だが畿内を介して間接的(前田1997)、東海との関係を否定し倭国中枢の影響(古川2003・2004)、近江の影響(植田2001・2002)など評価が割れている。

副葬品は、後期までは小型武器類+玉類、終末期に大型武器類+小型武器工具類+玉類となる(古川2003)。

若狭・越前 中期まで平野部の非絞込み単数型の方形周溝墓が主流で、後期になると周溝墓・墳丘墓が山に上がる。山陰や近畿北部との際立った差は1墳当たりの墓坑の数であり、中期中葉に墳丘墓が出現(福井市太田山1号方形墳丘墓)して以来、後期後半に至るまで基本的に単数型である。

単数型の方形墳丘墓は、後期前半の鯖江町王山1号、福井市太田山2号、福井市安保山4号、後期中頃の大野市山ヶ花20号、後期後半の鯖江町西山1号・4号、鯖江町王山3号、清水町片山鳥越3号、松岡町南春日山1号(大型)、終末期前半の鯖江町西山3号、勝山市城山1号、鯖江町王山5号下層、福井市下山4号、終末期中葉の福井市原目山1号などがある。

複数型の方形墳丘墓は、並列型が後期前葉の鯖江市王山4号、後期中葉の大野市山ヶ花4号、後期後葉の永平寺町袖高林4号、清水町片山鳥越4号(推定)、清水町小羽山24号、終末期前半の清水町片山鳥越5号(木棺の裏込めに角礫を充填)、永平寺町袖高林3号、複数同格型が終末期中頃の福井市原目山2号で5基、同3-1号方形周溝墓で4基、終末期後半の永平寺町袖高林1号で5基、複数格差型は終末期後半の松岡町乃木山で3基などがあるものの、近畿北部に比して少ない。

この地域の墳丘墓は丘陵上でも周溝をめぐらすものが基本的で、非絞込み単数型としての方形周溝墓をそのまま山の上に上げたものとみなすべきであり、後期の単数型が墳丘をもつにしても、丹後などで複数並列型→複数格差型→単数型の流れの結果として成立した単数型と同質には扱えない。したがって後期後半から終末期に1基あたりの埋葬数が増加するのは、他地域で平野から丘陵に上がった時点で生じた変化が、遅れて起こったのであり、その本質は、クランからのサブクランあるいはリネージの析出であり、その後あらためて絞込みが進行し、終末期末の清水町風巻神山4号方形墳丘墓は単数型である(神人竜虎画像鏡)。

山陰地方の影響を受けた四隅突出型墳丘墓は後期中葉～後半以降に7基が知られるが、終末期には1基のみとなる。単数型は後期中葉の清水町小羽山30号・33号、後期後半の小羽山23号、並列型は後期後葉の小羽山24号、複数格差型は後期後葉の小羽山26号(6基)、後期後葉の小羽山22号、終末期前半の福井市高柳2号は墓坑数不明である。

突出部付き方形墳丘墓は、終末期末の福井市中角SX1号(周溝墓・墓坑数不明)がある。

四隅突出型墳丘墓の小羽山26号・30号、方形墳丘墓の南春日山1号(後期後半)、清水町塚越(終末期前半頃)、原目山2号(終末期中頃)、乃木山(終末期後半)は規模が大きく、副葬品も小羽山30号、塚越、原目山2号、乃木山で鉄製武器・玉類がやや多く当地では突出している。なお、片山鳥越5号の埋葬施設構造(木棺の裏込めに角礫を充填)は瀬戸内の影響とみられる(森本2004)。

加賀・能登 中期以降終末期まで非絞込み単数型の方形周溝墓が主流で、後期後半から終末期前半では金沢市七ツ塚墳墓群、終末期には松任市一塚墳墓群が代表的である。越前と同様に後期後半から複数型が出現するが多い。

方形墳丘墓は、後期後半に複数格差型の金沢市七ツ塚1号(無区画墓説あり)、終末期中頃に複数格差型の津幡町七野1号方形墳丘墓がある。

四隅突出型墳丘墓は、終末期(庄内式並行期)前半の松任市一塚SX21(墓坑数不明)が方形周溝墓群中に混じる。

突出部付き方形墳丘墓は、終末期末に出現し、加賀市小菅波4号(並列型)、松任市一塚SX04号(型不明)、田鶴浜町垣吉B22号、中島町上町マンダラ1号・2号(型不明)などがある。松任市一塚SX03号(型不明)、金沢市戸水CST16号(型不明)は古墳初頭に下る。

前方後方形墳丘墓は、鳥屋町大槻11号墳(型不明)があるが古墳初頭に下る。

円形墳丘墓が後期に出現する。東部瀬戸内から近畿北部経由で伝わり、東方伝播の中継地となった(吉岡1997)。後期後半に複数同格型の田鶴浜町吉田経塚山1号、複数格差型の吉田経塚山2号、終末期前半に複数型の辰口町西山6号・12号、終末期前半に型不明寺井町寺井山5号がある。

越中 後期後半段階には方形周溝墓が一般的だが、終末期に四隅突出墳丘墓が出現する。

四隅突出墳丘墓は6基知られ、終末期(庄内式並行期)前半に婦中町鏡坂2号(墓坑数不明)、婦中町市富崎3号(墓坑数不明)、終末期中頃に婦中町六治古塚(墓坑数不明)、終末期後半に婦中町富崎1号(墓坑数不明)、終末期末に富崎2号(墓坑数不明)、古墳初頭に杉谷4号(墓坑数不明)がある。

前方後方形墳丘墓は、終末期後半に型不明の婦中町向野塚(時期下降説あり-古川)、型不明の高岡市石塚2号がある。

越後 方形墳丘墓は後期前半に単数型の寺泊町屋舗塚遺跡、突出部付き方形墳丘墓は、終末期後半に型不明の新津市八幡山がある。

J.東海

後期まで方形周溝墓が主流だったが、後期後葉に前方後方形墳丘墓が出現し、終末期後半に増加する。以後古墳時代前期まで東日本各地に前方後円墳が拡散する現象の震源地を、東海系土器の拡散と関連させて東海とみる説がある(赤塚1992・1995・1996)。

尾張 突出部付方形墳丘墓は、終末期前半に愛知県清洲町土田SZ02(墓坑数不明)・SZ06(墓坑数不明)、一宮市山中SZ03(墓坑数不明)・SZ13(単数型)がある。土田SD02・山中SZ03・SZ13は、後期の方形墳丘墓を終末期に突出部付方形に改変したものである(服部1994)。前方後方形墳丘墓は、終末期初頭に愛知県清洲町廻間SZ01(墓坑数不明)、終末期中葉に愛知県尾西市西上免SZ01(墓坑数不明)がある。

三河 突出部付方形墳丘墓が、後期前葉に複数同格型の愛知県豊田市川原SZ02、後期中葉に複数群在型の愛知県豊田市川原SZ01がある。

美濃 突出部付方形墳丘墓は、終末期後半に岐阜県大垣市東町田SZ10がある。前方後方形墳丘墓は、後期前葉に複数同格型の岐阜県岐阜市瑞龍寺山山頂墳(内行花文鏡)、終末期後葉に単数型の岐阜県美濃市美濃観音寺山(方格規矩鏡・小型仿製鏡)、岐阜県美濃市矢道高塚がある。方形墳丘墓は、後期後葉に岐阜県各務原市加佐美山1号がある。

伊勢 方形墳丘墓は、後期中葉に三重県津市高松方形墳丘墓、終末期前半に単数型の三重県嬉野町女牛谷SX4がある。

K.中部高地

信濃 後期に入って、千曲川流域(善光寺平)に円形墳丘墓、天竜川流域に方形墳丘墓が出現する。円形墳丘墓の副葬品に鉄剣・鉄釧・銅釧・玉類(ガラス・翡翠・鉄石英)が出現するのは、北陸・近畿北部との交易によるとみられる。終末期に入ると東海の影響が強まり、方形墳丘墓主体となる。

円形墳丘墓は、後期後半、長野市篠ノ井新幹線地点では55基の円形周溝墓が密集するほか、篠ノ井聖川堤防地点SDZ04・05・07、佐久市周防畑B1号・2号、中野市安源寺22・23号などがあり、いずれも小規模だが単数型で鉄剣・鉄釧・鉄鏃・ガラス玉など副葬品を持つものもある。後期後半で単数型の木島平村根塚は、大型で貼り石を持ち周囲に木

棺を配す。

突出部付き方形墳丘墓は、終末期前半に長野市篠ノ井聖川堤防地点SDZ06(墓坑数不明)、終末期後半に単数型の佐久市瀧ノ峯1号・2号、並列型の長野市北平1号、単数型の中野市安源寺城跡1号がある。

前方後方形墳丘墓は、終末期後葉に、単数型の長野県松本市弘法山前方後方形墳丘墓(斜縁獣帯鏡)がある。

L. 関 東

南関東では、中期以来の方形周溝墓に、後期後葉から規模や副葬品(青銅器が登場)の格差が生じる。終末期に前方後円形・前方後方形の周溝墓が出現する。それは相模湾岸と上総がほぼ同時で、鉄製武器・玉類・中国鏡などの副葬品も増加する。前方後方形墳丘墓出現を後期後葉以来の美濃尾張勢力との密接な関係を背景にした美濃尾張系首長群の登場、前方後円形墳丘墓出現を畿内系首長の登場と強く評価する立場(比田井1997)、そうでなく、地域の主体的選択を強調(大村1995、石川1999)、あるいは後期以来の自生的発展を重視(西川2002)する立場などに分かれる。

突出部付き方形墳丘墓は、終末期中葉に袖ヶ浦市滝ノ口9号(墓坑数不明)、前方後方形墳丘墓は、終末期中葉に単数型の千葉県木更津市高部32号(斜縁四獣鏡)、埼玉県吉見町三ノ耕地3号、終末期後葉に神奈川県海老名市秋葉山4号(墓坑数不明)、単数型の千葉県木更津市高部30号(斜縁二神二獣鏡)、平塚市真田北金目7号がある。

突出部付き円形墳丘墓は、終末期末に単数型の市原市小田部、前方後円形墳丘墓は、終末期中葉に単数型の千葉県市原市神門5号、終末期後葉に単数型の千葉県市原市神門4号、神奈川県海老名市秋葉山3号、終末期末に単数型の千葉県市原市神門3号がある。

北関東では、利根川・鬼怒川ライン以西の方形周溝墓分布圏に後期後半から円形周溝墓が登場するのは善光寺平との関係による。副葬品に鉄剣・鉄釧・銅釧・玉類が出現するのは、善光寺平、さらに遡れば北陸・近畿北部との取引によるとみられる。

III 考 察

A. 絞り込み顕在型墳丘墓の出現契機

墳丘墓あるいは厚葬墓など集団内の格差を示す墓の出現契機を検討する。Ⅱで示したように後期後半～終末期に列島各所で絞り込み顕在型墳丘墓(以下「墳丘墓」と略す場合があるが、墳丘墓一般を意味するのではないので要注意)が発達した。多少の時間差はありながらも、あちこちで並行的に被葬者の絞込みが進行し首長を含む析出集団(後述)が成長した事は明らかだが、その背景は何か。この関係をどのように評価するのか。

一般論として、一般成員墓と区別された絞り込み顕在型墳丘墓の成立にはいくつかの条件が必要である。

必要条件は、部族内でクラン間の格差が生じるのみならず、有力クラン内でも階層的に他と区別された存在、すなわち有力出自集団(サブクラン・リネージ)が析出(以下、析出集団と呼ぶ)していること。その中には首長やその家族が潜在し、有力者がさらに絞り込まれる場合がある。析出集団墓が絞り込み顕在型墳丘墓の形をとるに当たっては、階層差の墳丘による表現が求められた社会であることが十分条件となる。

析出集団が存在するにつけても、問題となるのは、析出集団が、絞り込み顕在型墳丘墓出現期以降に成長したのか、すでに成長していたが墳丘墓としての表現がその時期から始まったのかである。絞り込み顕在型墳丘墓出現期の析出集団と一般成員との関係はいかなるものかを知るには、青銅器祭祀の動向との関係をみるのが良い。

後述するように、後期以降の絞り込み顕在型墳丘墓の出現は、各地域における青銅器祭祀の終焉と一連の現象で

あることが明らかとなった。それからみると、青銅器祭祀が盛行していた間は、析出集団が集団の利害を代表しつつも、むやみな突出は抑制される状況が続いていたが、青銅器祭祀の衰退した集団でのみ析出集団の突出が可能となったのであり、こうした様相から見ると、「析出集団がすでに成長していたが墳丘墓としての表現がこの時期から始まった」のではなく、「析出集団が墳丘墓出現期に成長した」とみるべきである。

ではなぜ、この時期に析出集団の成長が可能になったのか。抑制要因の減衰と促進要因の増進が生じたのは何故かを考察する。当該期に広域に渡って農業生産力が上昇し開発が進展し、富の蓄積とその保有の不均等による階層化が進んだ結果として首長層が析出したのか。おそらく否であろう。大型墳丘墓は、肥沃な平野を有す農業生産力の高そうな地域ばかりでなく、近畿北部のような狭隘な所でも大きな時間差なく出現している。

むしろ1世紀～2世紀にかけての後期前半期、気候変動(寒冷化)も原因の一つであろうが、日本列島の広い範囲にわたって、既存集落の放棄・断絶、特定集落への集住が生じたことが近年明らかにされつつある(小沢2000・2002)。集団の移動・離合集散・再編が進行したことに伴って、地縁的集団の再編成と、出自集団的紐帯の弛緩が同時進行したと考えられる。

そうした状況下で、再編された地縁的集団community相互の軋轢が激化するとともに、地縁的集団の紐帯・利害と、さらに弛緩しつつある出自集団の紐帯・利害とが衝突しあうようになり、また中期以来の階層分化が集団内に亀裂を発生させ、それら諸々の軋轢・衝突・対立の調停・調整・沈静化などが不可欠となったであろう。そうした社会的調整業務が、中期以来の階層分化の結果析出していた各居住集団内の特定出自集団に担われるようになり(有力になれば析出集団)、統合規模が拡大した場合には析出集団が担う調整業務も広域化して複雑性・重要性が増加し、調停・調整、軋轢の沈静化の必要性から、多くの居住集団内の析出集団群(相互に同族とは限らない)を横断する連携が形成されたと推定できる。

そうした中で、調整業務の執行に成功した析出集団が、その過程で財(通常は生存財、時として貴重財)の保有上有利な立場に立つことによって、居住集団の中に財の不均等が生じ、析出集団と居住集団との間に階層差の亀裂が入りこみ緊張関係が生じるようになる。この時期には、階層分化の主体が首長個人や家族ではなく、それらを含んだ親族集団(出自集団)であったことに注意を要する。そうした状況下で、氏族長を含む析出集団は、自己の元への財の蓄積と地位の固定的継承を図ろうとし、それに対して居住集団あるいは他の出自集団はそれを抑制しようとして対抗しているというのが基本的状況であったと推定できる。

そうした事態への各集団の対応は相対立する以下の二つの方向に分かれた。絞り込み顕在型墳丘墓を発達させない方向①、および発達させる方向②である。

①青銅製祭器を用いて居住集団およびその集合体(結果的に氏族の集合体になり、規模が拡大すれば部族に近づく)が実施する在来の集団祭祀＝統合化(集団内・集団間)儀礼をいっそう盛大化し、集団の共同性を強化する方向であり、採用したのは銅矛・銅戈を祭器とする北部九州と、銅鐸を用いる中国・四国・近畿・北陸・東海の諸集団であった。そもそも青銅器祭祀が弥生社会に登場したのは中期前半であり、この時期は前期以来の人口増の結果として集団の拡散が生じ、母村からの分村の分節が広範に生じた時期であり(田中2000)、青銅器祭祀の定着と盛行は、母村＝分村の結束、あるいは開拓地での新たな地縁的集団の結成などに際しての統合化儀礼が切実に必要とされたのを背景とする。後期前半期にも上述の事情によって再び統合化儀礼の強化が必要となったのである。

この青銅器祭祀の執行にあたっての析出集団の役割には問題があり、青銅器の埋納を、「エリート」の威信を示し青銅器の希少性を維持するために消費する戦略であって、墓への副葬と同意義とみなす説がある(桑原1995)。確かに青銅製祭器の生産や祭祀の執行には析出集団が大きな役割を果たしたであろうが、青銅器祭祀が盛んな間は、絞り込み顕在型墳丘墓が発達しないことから、祭器の生産や祭祀実施の目的は、析出集団の個別的利益の追求というより、祭祀に参加する居住集団あるいはその集合体(結果的にクランの集合体ないし部族と一致)が全体的利益の増進のために析出集団に負託した面を重視すべきであろう。析出集団の利害と、居住集団およびその集合体全体が関わる青銅器祭祀の目的に齟齬を来たした場合でも、青銅器祭祀の盛行期には析出集団の突出が抑制されていたことがわかる。

祭祀を実施した場所と祭器を埋納した場所との関係は明らかでないが、後者は特定の居住集団から離れた例が多く、複数の居住集団が共同で関わったことを伺わせる例も多い。祭祀の主執行者が、族的集団か地縁的集団かは問題であるが、共同執行の範囲が拡大するにつれて両者は重複していく。

②青銅器祭祀を終息させ、地域色を帯びた絞り込み顕在型墳丘墓およびそこでの被葬者に対する祭祀を発達させ、各種の公共職務を執行する集団指導者層(析出集団)の権能・利害調整機能を強化し、結果的に析出集団の財のコントロールを正当化する方向性である。採用したのは、四国北部・山陽・山陰・近畿北部・北陸の諸集団であった。統合化儀礼としての青銅器祭祀の対象が地霊・穀霊あるいは自然現象をつかさどる神など特定集団の外部の神であったと推定できるのに対し、墳墓における祭祀の対象は、当該期には財や地位の継承はまだ父系ではないので無人称祖霊(田中1995)であったのであろうが、直接の対象は墳丘墓被葬者となっている。墳丘墓被葬者ないし無人称祖霊への祭祀が、青銅製祭器による集団祭祀に置換したのはなぜか。

かつて近藤義郎氏は、首長が祖霊祭祀によって「集団の生成力としての祖霊」から受け継いだ霊力で、「自然の生成力としての呪霊」に働きかけるうちに、呪霊が人格化して祖霊と重合し包括されて、祖霊祭祀が農耕祭祀を兼ねるようになり、そうした祖霊祭祀を司祭した前首長の霊威を祀りその霊力を次期首長が引き継ぐことが集団にとって重大事となったと捉えた(近藤1983)。しかし、近藤氏が前提するように各氏族の祖霊が同族的に結合して部族祖霊になるとは考え難く(後述)、各析出集団に対応する無人称祖霊の集合体がただちに部族祖霊となるのであれば、単純に祖霊祭祀が農耕祭祀を兼任して、独立の農耕祭祀が必要なくなるとは考えられない。青銅器祭祀の消滅の原因は、農耕祭祀の祖霊祭祀への統合ではなく、統合化祭祀の質の転換とらえた方がよい。弥生後期から終末期にかけて、先述したような集団内・集団間での様々な軋轢・衝突が激化していた集団群の再編成と統合は、とうてい同族原理に基づいては果たせず、調停・調整など高度な集団統合能力を有しその維持・継承を果たした集団が優勢となると、そうした指導力を有する析出集団やその長への求心化と崇敬が旧来の集団性を背後に押しやることとなった。他方で農耕祭祀は、祖霊祭祀と統合・吸収されて消滅したのではなく、祭器と祭場を変えて継続したと考えているが、これについては別稿に譲りたい。

①の青銅器祭祀を盛行させた諸集団でも、終末期には青銅器祭祀を終焉させて墳丘墓造営に移行し、先に②の方向を採っていた諸集団と同一歩調をとることになった。後期後半から終末期という時期に、青銅器祭祀の終焉と、絞り込み顕在型墳丘墓の造営が一般化した事情は、当該時期における社会情勢・政治情勢の複雑性と困難性が、析出集団とりわけその指導者への依存を加速度的に強めることになり、有力な指導者を戴く析出集団との連携が、既存の日常的コミュニケーションを超えて形成されるようになったことに求められよう。

B. 墳丘墓の空間的広がりの評価

特定型式の墳丘墓の空間的広がり、その時間的な変動の様相を概観しておく。

円形墳丘墓は、後期に播磨・摂津を中心とし、讃岐・阿波・和泉・河内・丹波南部に及ぶ。終末期前半にも播磨・摂津中心だが、重心は摂津に移り、讃岐・阿波・丹波南部、河内から大和・山城、さらに近江に展開する。前半には単発的に伯耆・丹後・加賀に見られ、後半には豊前に出現する。

この円形墳丘墓をベースに突出部付き円形墳丘墓が成立する。後期後葉～末に、備中・讃岐・阿波・播磨・摂津・和泉という播磨灘・大阪湾沿岸部にほぼ同時に出現する。終末期前半に播磨・阿波に収束しつつ近江に展開し、終末期後半には播磨・丹波・近江に見られる。

さらに突出部が発達した前方後円形墳丘墓が、終末期後半以降に讃岐(鶴尾神社4号)・大和(ホケノ山)・丹波(黒田)に見られるほか、遠方の肥前(西一本杉ST008・津古2号)および相模(秋葉山3号)・上総(神門5号・4号・3号)に突如出現する。

方形墳丘墓については、いくつかの分布圏に分かれる。播磨灘・大阪湾沿岸部附近では、後期に備前・備中を中心に讃岐・美作・播磨・大和・山城に少数あり、終末期にも備前・備中を中心に讃岐・播磨・摂津・大和に少数ある。日本海側では、後期に因幡・丹後・越前を中心に、出雲・伯耆・但馬・丹波加賀・越後に及び、終末期には越前が中心となり出雲・因幡・

丹後・丹波・加賀に少数ある。このほか伊勢湾沿岸では、後期に伊勢・美濃、終末期に伊勢にある。九州では後期・終末期を通じて筑前に少数あるが、終末期に豊前に多く出現する。

この方形墳丘墓をベースに**突出部付き方形墳丘墓**が成立する。後期に、播磨・和泉・河内・大和・近江・三河に出現し、終末期には播磨・大和・近江に加えて越前・加賀・越後・尾張・美濃・信濃に展開するほか、遠方の筑前・上総に出現する。このうち加賀・尾張・信濃にまともに見られる。

さらに突出部が発達した**前方後方形墳丘墓**が、終末期に讃岐（空港跡地ST05）・河内（久宝寺南群1号）・大和（メクリ1号）・山城（芝ヶ原12号）・近江（法勝寺SDX23・神郷亀塚・小松・浅小井高木SX01・経田SX3・熊野木6号・熊野木12号）・越中（向野塚）・尾張（廻間SZ01・西上免SZ01）・美濃（観音寺山・矢道高塚）・信濃（弘法山）に見られるほか、遠方の肥前（赤坂・吉野ヶ里ST942）および相模（秋葉山4号・北金目7号）・武蔵（三ノ耕地3号）上総（高部32号・高部30号）に突如出現する。

方形墳丘墓の変種が日本海側で展開する。**貼り石方形墳丘墓**が中期段階に石見・出雲・但馬・丹後・丹波に出現していたが、後期には石見・出雲・備後・伯耆・因幡にあり、やや離れて近江に及ぶ。**貼り石方形墳丘墓**から発生した**四隅突出型墳丘墓**は、後期に出雲・伯耆を中心に石見・安芸北部・備後北部・美作に及ぶほか、遠隔地の越前に至る。終末期には出雲を中心とするが、備後北部・伯耆・因幡・越前で減る一方、加賀・越中に展開する。

以上のように、絞り込み顕在型墳丘墓が律令体制期の数国分ほどの分布域をもっている理由は何か。かつて近藤義郎氏は、「祭祀的同族」「地方的祭祀同族集団」の形成を考えた（近藤1983）。近藤氏は、氏族の血縁的同祖同族的結合体として完結体をなす部族（これ自体、通常の部族の定義とは異なる特殊なものである）が、ゆるやかな上下の結合で結ばれた部族連合（血縁的同祖同族関係として表現される）の成立を考えているから（近藤1983）、「祭祀的同族」も部族や部族連合を基盤とすると考えられているのであろう。しかし、後述するように、部族や部族連合の紐帯を血縁的同祖同族関係とはみなし難い。むしろ、居住集団間の利害調整を付託されつつ集団の束縛・規制力から脱却しつつあった各析出集団が、居住集団との緊張状態の顕在化に対処すべく、弥生時代中期以来の日常的交流（コミュニケーション）圏を背景にして、析出集団（その長）どうしの連携を図るようになり（high class endogamyなどの手段による）、人・物・情報の交換網を構築して一般的居住集団員との格差の固定化を図るとともに、指導者層としての権能、利害調整機能を強化させようとし、その広がりが墳丘墓の地域色の範囲に結果したと推定できる。そして地域色範囲の小規模な変動は、析出集団間の連携関係締結範囲の推移を反映しているであろう。

後期において律令体制期の数国程度の範囲ごとに地域色が強い大型墳丘墓が発達し、最終的に、より「画一的な」前方後円墳が広域に成立することの説明論理として提唱された、「血縁的同祖同族関係」「擬制的同祖同族関係」の形成と拡大（近藤1983）は妥当であろうか。

近藤氏の論理を持ってすれば、ネズミ講の無限連鎖を逆に辿るように、「氏族」→「部族」（氏族の血縁的同祖同族的関係として完結体）→「部族連合」（部族の同祖同族的関係による結合体）→「各地の首長」（大和連合との間に締結）という形で、日本中の集団が擬制的同祖同族関係に纏め上げられてしまう。しかしこれはいささか非現実的だ。古代においてすら、そのような祖霊（ウヂの神話的始祖たち）どうしの同祖同族的関係の形成は、当然ながらウヂという族的かつ政治的な集団の形成を前提とした上で、ウジ間の国家的秩序の形成期（7世紀末～8世紀初）ないし再編期（8世紀末～9世紀初）に、天武あるいは桓武の意志に基づいて、天皇家の始祖を頂点にきわめて恣意的・政治的になされたものであった。5世紀後半以降のウジの成立後、カキの分割領有がウヂの細分化と利害対立をもたらし、7世紀中頃までに、各ウヂは排他的な同族意識や互いの抜きがたい対立感情をもつに至っていた（熊谷 2001）。おそらく系譜もウジごとに別個で、容易に融合するものではなかったと推定でき、だからこそ支配者集団の結束が必要となった7世紀後半に、強権的に擬制的同族関係を造作する必要があったのであろう。したがって、そのような関係の形成を、むやみに弥生・古墳時代まで遡らせるのは誤りである（岩永 2003）。また古代において擬制的同族関係の空間的広がりは一円的でなく、無制限に広がるものでもない。たとえば、『新撰姓氏録』などから知られる中臣氏同族は、摂津国では島上郡一中臣連、島下郡一中臣藍連・中臣大田連、河内国では、讃良郡一平岡連、若江郡一川跨連、丹比郡一中臣高良比連・中臣酒屋連・菅生朝臣・狭山連・村山連、

和泉国では、大鳥郡一殿来連・蜂田連・大鳥連・和太連・民直・評連・狭山連、和泉郡一宮処朝臣といった具合である(遠山 1993)。したがって擬制的同族関係は、「国」はおろか「道」を越えてはるか広域に広がる前方後円墳の分布域に対して適用できるようなものではない。

ではいかに考えるべきか。近藤氏の説は、氏族が地縁的居住集団(単数or複数)と一致することを前提とする。また部族は氏族の血縁的同祖同族的結合関係による完結体とされているから、一円的居住集団たることをイメージされているようである。しかし出自集団と地縁集団との関係はそれに限らない(キージング(小川・笠原・河合訳)1982)。近藤氏はキージングのタイプ1・2のみを考えているようである。キージングのタイプ3・4も含めて考えると、一つの地域に出自集団(単系と限らないのでクランと呼ぶのは妥当でないが近藤説との関わりで以下氏族と呼ぶ)がパッチワーク状に入り乱れた状態であり、地縁的連携が深まると、近縁氏族をいくつか束ねた部族の一部を含むことになるが(近縁な氏族が部族的関係に纏まるにしても)、異系統氏族も含めれば、1地域=1部族に塗りつぶされるとは限らず、複数を含む可能性があるから、地域全体が一円的に1部族に纏まるのではない。

以上のような集団構成で、集団のリーダー間の連携のあり方を考えると、地縁的居住集団(集落・集落群)と、それらを串刺し状に連結する出自集団(単系と限らないのでクランと呼ぶのは妥当でないが適当な呼称がないのであえてそう呼んでおく)が存在し、両者の利害は緊張関係にあり、時として矛盾する。居住集団どうしの地縁的連携が進行する時には、出自集団あるいはその分節segment(単系と限らないのでサブクランあるいはリネージと呼ぶのは妥当でないがあえてそう呼んでおく)どうしの血縁的関係をベースとした連合一部族的形態—も進むので、時間の経過とともに出自集団間の通婚で互いの連帯関係は深まり部族的結束も深まろうが、居住集団どうしの地縁的連携体の中には幾つもの出自集団が入り乱れており、単一部族に収まる保証も無く、その長による出自集団間・集落間での利害調整が必要となる。そして階層分解が進むにつれ、その調整業務はさらに重要かつ困難になっていく。したがって、地縁的居住集団群のリーダーとしての首長どうしの連携は、首長の継承が安定しウチが形成される前にあっては、次項で述べるように、同族関係として擬制しにくいものと考えざるを得ない。

C. 墳丘墓と青銅器祭祀

青銅器祭祀の盛衰と絞り込み頭在型墳丘墓との関係はどのようになっているか検討する(36・37頁第1表)。

北部九州では後期前葉には広形銅矛が出現しており、その祭祀の存続年代の下限は明確ではないが、福岡県春日市辻田遺跡Ⅱ区大溝出土の広形銅矛片に共伴した土器の年代(岩永1989)から見て後期のうちに終了していたとみてよからう。「伊都国」域では「奴国」域に比して絞り込み頭在型墳丘墓の出現が早く後期後葉には見られるが、これは「伊都国」域では広形銅矛の生産・埋納ともに皆無ではないものの、ほとんど無いことと関係するであろう。瀬戸内海側の豊前では、広形銅矛祭祀終了後の終末期に、絞り込み頭在型墳丘墓が急に多く出現し、終末期の墳丘墓数では筑前を凌駕する。瀬戸内海沿岸部の動向と関わるであろう。

中国・四国地方以東を扱うについては、弥生後期に存在する銅鐸や剣形祭器の年代観に言及しておく必要がある。細かい根拠は省略するが、年代観の概略を示しておく。銅剣でもっとも後出する平形銅剣Ⅱ式については、かつて扁平鈕式新段階に併行させたが(岩永1996)、それを含めて突線鈕2式までの幅を見込んでおく(難波1997)。そうすると中国・四国以東編年での中期末～後期初頭(北部九州後期前葉併行)に置ける。銅鐸は、突線鈕1式が後期初頭に成立し、以下突線鈕5式は後期末までに収まり、終末期までは及ばないと考えておく。以下、「国」別に後期における銅鐸と墳丘墓の検出状況を述べるが、突線鈕式の小片が集落から出土するものは、祭器としての埋納とは異なるために除外する。

讃岐では、銅鐸は突線鈕2式を最後として後続がないのは、後期に入り各種の墳丘墓が登場する状況と対応している。阿波では、突線鈕1式から5式に及ぶ銅鐸が多数出土するが、墳丘墓は後期末の延命ST2012以降に増加するので、入れ替わる状況と言ってよい。

備前・備中でも銅鐸は突線鈕2式を最後として後続がない。これは後期に入り方形墳丘墓が登場し、前葉～中葉に郭

の規模や朱の使用量で墳丘墓間の格差が生じ始め、後葉に至って大型墳丘墓が出現し、墳丘墓間の格差、墳丘墓被葬者と一般集団成員との格差が明瞭に示されるに至ると整合する。播磨では、突線鈕1式・4式が揖保川・千種川の上流部で出土する。墳丘墓は、後期前半(原・田中、小神)にもあるが揖保川・千種川下流域であり、増加するのは後葉以降であるから交代すると言ってよい。

摂津では、淀川右岸の山際に突線鈕2・3・4・5式が並ぶように分布している。一方、墳丘墓は後期後半以降に淀川右岸の平野部に出現するが、主体部の削平により絞り込みの度合いは不明である。明確な絞り込み顕在型墳丘墓は終末期に下る。河内・和泉では、突線鈕3・4式が南河内附近に分布する。墳丘墓は後期前半に和泉の平野部に出現しているが、主体部の削平により絞り込みの度合いは不明である。明確な絞り込み顕在型墳丘墓は終末期に下る。大和の盆地部では突線鈕1式が最後であるのに対応して絞り込み顕在型墳丘墓は後期に出現しており終末期に増加する。東方山中では突線鈕4～5式があるため、終末期に入ってから絞り込み顕在型墳丘墓が多く出現する。山城では、突線鈕3式が桂川・宇治川・木津川の合流部にあるが、墳丘墓は、木津川沿岸に後期前半から出現し、増えるのは終末期からである。

近江では、小篠原大岩山で突線鈕1式3点、2式3点、3式12点、4式1点、5式1点がまとまって出土している。ここに集積される前に使用されていた場所は不明であるが、後期を通じて銅鐸が流入していたとみられる。墳丘墓は後期に少数あるが、各種の墳丘墓が一斉に多く出現するのは終末期に入ってからである。

石見では、突線鈕1式で終了し、入れ替わりに後期前葉から墳丘墓が登場する。出雲では、中期後葉段階ですでに貼り石方形墳丘墓や四隅突出型墳丘墓が登場していたが、多数存在した銅鐸が扁平鈕式で終了し(加茂岩倉39点ほか)、銅剣も中細形銅剣c類(神庭荒神谷358点ほか)で途絶えると、後期から墳丘墓が本格的に増加する。備後北部・安芸北部に銅鐸は存在せず、墳丘墓は中期後葉には登場しており、後期に入ると増加する。伯耆では、銅鐸は扁平鈕式までしか存在しないのに対応して、後期初頭から各種の墳丘墓が多く出現する。因幡では、突線鈕式と推定される1点が存在するが、基本的には伯耆と同じ状況である。

但馬は、突線鈕5式の破片(久田谷)を除くと外縁付鈕式しかない。後期に入ると丘陵上の墳丘墓(台状墓)が盛行する。丹後(由良川流域を除く)を全体でみると、突線鈕3式・5式がある一方で、後期全般を通じて墳丘墓(台状墓)が盛行しており、単純に交替状況にはない。ただし、現在の野田川町・加悦町などの中部、その北側の北部、由良川流域の南部に分けると、北部では銅鐸はなく後期を通じて墳丘墓がある。中部では、突線鈕5式があり、墳丘墓の発達は終末期に入ってからのものである。南部では突線鈕3式があり、後期の墳丘墓は発達しない。丹波の北部(福知山盆地)・西南部・東南部に銅鐸は存在せず、後期に入って各種墳丘墓が盛行する。

越前では、突線鈕2式で銅鐸が終了するのに対し、各種の墳丘墓が盛行する。加賀・能登・越中・越後には後期の銅鐸は存在しない。

尾張では、突線鈕2・3・5式が存在し後期を通じて銅鐸が流入するのに対応して、墳丘墓は終末期から増加する。三河では、銅鐸は突線鈕1・3・4・5式が続いて流入しており南半部に多い。墳丘墓は後期前・中葉にあり、時期的には銅鐸と併行するが、地域的にはずれがある。美濃では、後期に銅鐸は存在せず、墳丘墓が出現している。伊勢では突線鈕3・4式があり、ほぼ入れ替わるように、後期中葉から墳丘墓が出現する。

信濃では、中央部に突線鈕3式が存在するが、円形墳丘墓が盛行する善光寺平とはずれている。

以上のように、後期以降の絞り込み顕在型墳丘墓の出現は、各地域における青銅器祭祀の終焉と一連の現象であることが明らかとなった。両者の連関はいかなるものか。

青銅器祭祀の儀礼が埋納地の近傍でなされたのか、集落内で挙行の後、埋納地に運んだのかは不明であるが、埋納地は、ほとんどの場合、特定の集落や集団との関係が伺いにくい場所である。また青銅器祭祀は、人口増による分村、あらたな開拓地への分岐集団の定着と組織化が活発化した中期前半に始まり、集落の断絶・移動が激化し集団の再編・再組織化(混合・再統合)が顕著になった中期末から後期初頭に一段と活発化することから、ある程度の広域をカバー

時期	北部九州				東部九州		四 国				阿 波	
	肥 前		筑 前		豊 前		伊 予		讃 岐		阿 波	
	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器
後期	前 半	YT	N H	YT	N H			K K	FG □ ?○ FK ○ ?□	K K・T 2		K・T 1 K・T 2
	後 半		↓	↑ FD □ FK □ FD ? FK □	↓	↑ FG □ FD □ FD □ FD ? H □			FK ○ ?Ω		FK Ω T Ω	T 4 T 5 T ?
終末期	前 半			FK □ FK ○ T ○					↑ FK Ω ?● FK ○ ?■			
	後 半	T ● ?● ?■		↓ ?□		FD ○ FK □			T ● T ● \$		↑ T ○	
古墳 初頭	?						H ● ?●				↓	

時期	山 陽								近畿中部（畿内）			
	備前・備中		美 作		播 磨		摂 津		河内・和泉		大 和	
	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器
後期	前 半	FG □ FD □ FG □	K K・T 2	FG ◇ FD □ FD ○		FK □ ?△ ?Ω	T 1	↑ T 2 T 3 T 4 T 5	?Ω ?△ ↑ ?○	T 3 T 4	↑ ?□ H △	T 1 T 3 or 4
	後 半	FK □ FG □・FG \$ FD □・FK \$			FD ○ ↑ T ?		?○ ?○ ?Ω		↓ T ● ?○ T △ T ○		↓ T □ ↑ T □ ?△ H □ TorH □ ?○ FD △ ?■ ↓ ?△	
終末期	前 半	FD □ T □			FK \$ FK Ω FK ○ H ○ T Ω T ○		T ○ ↑ H □ ?○					
	後 半	FD □ H □ T □			FK □ FK ○ FK Ω		↓		↓ ?■			FK ● ↓
古墳 初頭	FK ● T ●											

時期	近畿中部（畿内）		近畿東部		山 陰							
	山 城		近 江		石 見		出 雲		備後北部・安芸北部		伯 耆	
	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器
後期	前 半	FG □ T 3	↑ ?△	T 1 T 2 T 3 T 4 T 5	FD □ FD ◇	T 1	?◇ FD □ FD ◇ FK ◇		FG □ FD □ FK ◇ T ◇ FD ◇		?□ FK ◇ ?◇ FG □ FD ◇ FK ◇ H □ FD ◇ FD □ FK □	
	後 半		↓				FD □ FD ◇ FK ◇ FD □ ↑ FD or K ◇					
終末期	前 半	↑ T ■ FK ○	↑ ?○ ?■				FD ◇ FK ◇ T □ T ◇		FK ◇		FG ○ FD □ T □ ?◇ FD □ ?□	
	後 半	↓	↓						↑ FK △			
古墳 初頭												

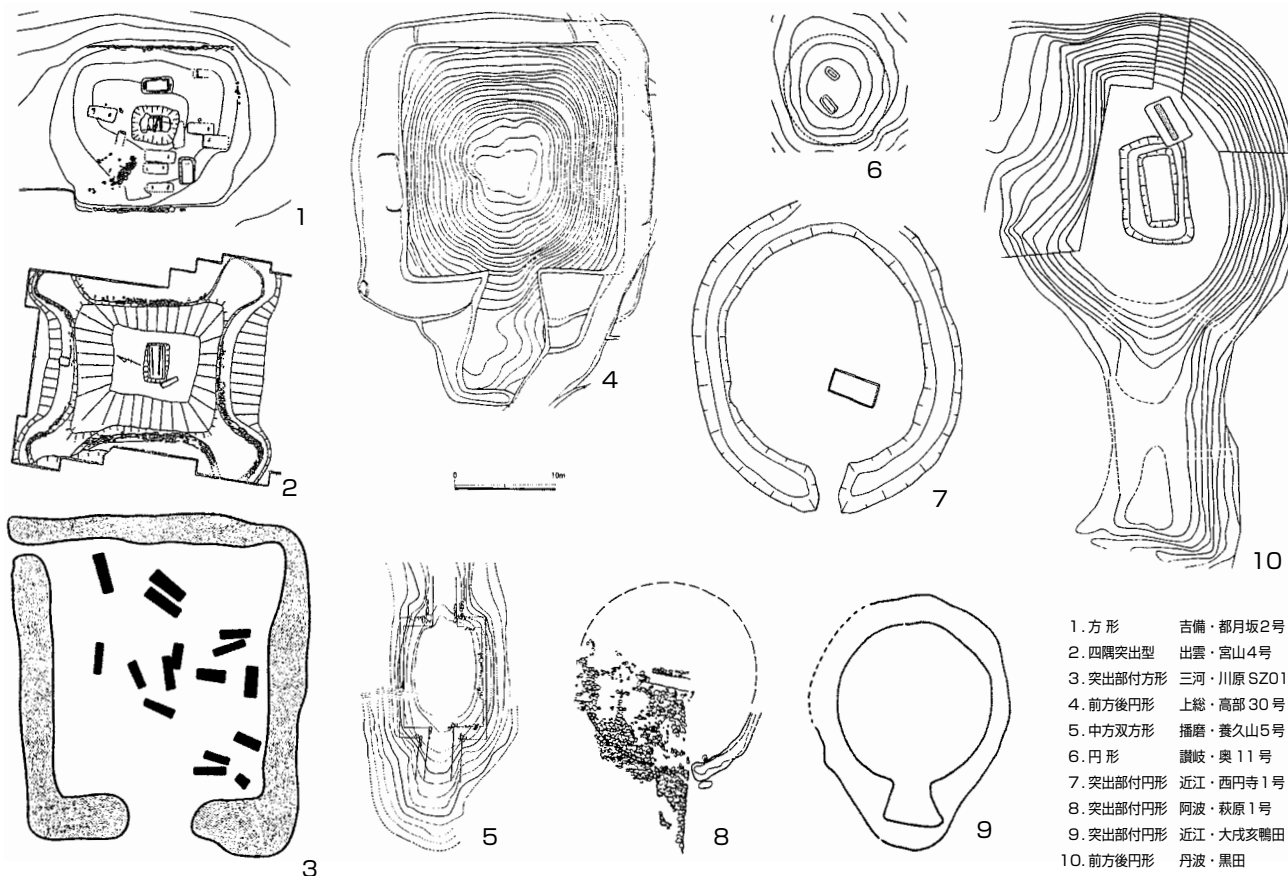
時期	山 陰		近畿北部						北 陸			
	因 幡		丹 後		但 馬		丹 波		若狭・越前		加賀・能登	
	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器
後期	前 半	FD □ T ?	FK □				↑ F ○ T ○ ?○		T □ H □ T 2			
	後 半	FD □ FK □ FG □ FD □ H □ ?□	FK □ FD □ FK □	T 3 T 5	FD □ FK □		FD □ ↓		T □ H □ T ◇ T □ H □ T ◇ H ◇ FK ◇		FD ○ FK ○ FK □	
終末期	前 半	FK □	F ○ ↑ FK □				?□		T □ H □ FK ◇		F ○ ?○ ?◇	
	後 半	FK ◇ T □	↓				?○ FK □ ?Ω ?△		T □ FD □ FD □ FK □ T □ ?△		?△ H □ ?△ ?■	
古墳 初頭			FK □ T □				由良川 兵庫丹波 東南部					

第1表 墳丘墓と青銅祭器の消長

時期	北 陸				東 海							
	越 中		越 後		尾 張		三 河		美 濃		伊 勢	
	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器
後期	前半		T □			T 2 T 3	FD 凸	T 1	FD ■			
	後半					T 5 T ?	FG 凸	T 3 T 4 T 5	?		?	T 3 T 4
終末期	前半	◇			?	凸 ? ■ T 凸 ?					T □	
	後半	◇ ? ■										
	古墳 初頭	◇ ? ■										

時期	中部高地		関東	
	信 濃		相模・上総	
	墳丘墓	青銅祭器	墳丘墓	青銅祭器
後期	前半			
	後半	T 3		
終末期	前半	?		
	後半	H 凸 T 凸 T ■	?	凸 T ■ ? ■ T ● ? ■ T ■ T □ T ●
	古墳 初頭			

凡 例											
墳丘墓						青銅祭器					
内的構成			墳丘形態			銅 矛			銅 鐙		
DS	複数クラン代表者選抜型		□	方形		N	中広形		T1	突線鈕1式	
YT	特定クラン有力層抽出型		◇	四隅突出		H	広形		T2	突線鈕2式	
FG	複数群在型		凸	突出部付方形					T3	突線鈕3式	
FD	複数同格型		■	前方後方形					T4	突線鈕4式	
FK	複数格差型		○	円形					T5	突線鈕5式	
H	並列型		Ω	突出部付円形							
T	単数型		§	中円(方)双方形							
			●	前方後円形							
? Ω (等) ⇒ 構成不明。 FD (等) ? ⇒ 墳形不明						T ? ⇒ 突線鈕式だけ何式か不明。					
時期が絞り込めない墳墓の可能性の幅を示す。 この間ずっと存続することを意味するわけではない						H ↓ その型式の存続年代幅を示す。					



第2図 墳丘墓の墳丘形態(1/750)

する集団群（居住集団群であり出自集団群でもある。特定の出自集団（ラメージ群）や部族の範囲を超える）の再統合・統合化促進儀礼であった可能性が強い。

それに対して、墳丘墓造営者の出身母体は、青銅器祭祀の主体となった大きな集団群から析出された特定有力親族集団（出自集団）ないしその分節であるが、これを固定的な集団とは考えられない。田中良之氏の研究によれば、古墳時代後半期には、親族関係が通世代原理に変化し、継承が安定したために、「先代」やさらに遡った個別人称を持った「祖霊」との血縁関係の確認と維持が、後継者の正当性や優位性を保証するようになり、葬送行為や葬送儀礼も反復的に行われるようになったのに対し、古墳時代前半期には死者は同世代にとって意味をもつ表徴であり、共同体全体の無人称の「祖霊」であったという（田中 1995）。これを受ければ、弥生時代の首長はさらに継承が不安定であり、特定の地縁的集団首長の出身親族集団（クラン）分節が固定的ではないから、特定形式の首長墓の分布範囲の背後にある首長間の連携は、日常的交流から生まれる政治的連携・連合ではあっても、rigidな同祖同族観念の形成を伴わないと考えるべきであろう。したがってそこで執行される墳丘墓祭祀も、集団の再生産を観念的に担った首長個人への祭祀ではあっても、特定親族集団の祖霊に対してではない（注4）。だからこそ弥生時代を通じて形成されてきた集団間の通交関係をベースにしつつ、短期間に広大に面的に拡大できたのである。しかしこれを強固な政治的統合体とみなすことはできない。

D. 威信財流通の掌握と墳丘墓

後期後半～終末期に列島各所で並行的に大型墳丘墓が発達したのは、青銅器（鏡・鏃）・鉄器（武器・工具）・ガラス製品など副葬品の出現や量的増大と関連した現象であることを重視すれば、2世紀末における大陸からの鏡・鉄製武器・ガラス製品などを主体とする舶載品の流入再開を契機として、それらの入手・分配・流通を掌握ないし関与できた集団およびその指導者層が、政治的威信を獲得ないし増大させ、舶載品の分配の見返りによる労働力提供などによって厚葬墓に葬られるようになったと推定できる。その意味で北部九州における前期末～後期前葉、とりわけ中期後葉における厚葬墓の出現と背景を等しくし、同類の現象の再現と評価して良い。特定墳丘墓型式の広がり、威信財の入手と分配を掌握した有力首長との連携関係を中核とする首長群ネットワークの範囲を示すであろう。

もっとも稀少品の獲得による威信の獲得・維持は、威信の基礎が脆弱であり、舶載品の継続的入手・分配を継続しなければ維持できないのであって、舶載品流入・流通のセンターとルートが変わったり、アクセス権を失って入手が滞ったりすれば、威信がたちまち低下・喪失したり新たなセンターへの従属を余儀なくされる。近畿北部（丹後・丹波・但馬）の優位が短期で終わり、瀬戸内海沿岸部の播磨・讃岐・阿波側に移り、さらに続いて近畿中部に移ったのが好例である。つまり「威信財システム」は歴史的偶然に左右され易く、配布物が無くなれば最後なのであって、常に次の配布物の用意に追いつかれ不可避免的に自転車操業に陥る。河野一隆氏は「飽和」を問題とするが（河野1998）、問題なのはコントロール可能な「飽和」でなく「枯渇」の方である。特に配布物が自前製品でなく舶載品に頼る場合、他力本願の不安定さが増す。しかし逆に、首長群が渴望する威信財の入手と分配を掌握し継続できれば、短期間にきわめて広範あるいは遠隔地の首長群との連携関係を形成することも可能だった。それを示すのが前方後円墳の分布の拡張である。

こうしてみると、後期後半～終末期の大型墳丘墓の発達、農業生産力の上昇による富の蓄積を背景とする階層分化というような経済的下部構造の変動を伴わずに起こり得た現象であり、「首長制社会」から「初期国家」への移行期の現象などではなく、同じ首長制の中での段階差と見なす理解（岩永2002）と整合する。重要な点は、このような首長どうしの人的結合を根幹とした政治的連携の場合、征服による領域内の土地全体の所有や住民全体の隷属化を前提せずに広範な政治的統合体の樹立が可能となった点である。また反面、統合の質がそのような機構を介さぬものであったがゆえに、統合体の結束は脆いものであって、ひとたび形成された前方後円墳の分布域が継続的・安定的な政治的統合体とはなり得なかった原因もそこにある。

現在、前方後円墳の波及をもって、近畿中部の大首長と地方首長との政治的関係が安定的に成立したとみなし、前

方後円墳分布圏内に、近畿中部の大首長を最高位とし、墳形の違いや墳丘規模の大小などで表現される首長間の階層的な政治秩序が確立したとする説が根強い(しかもそれを国家段階の政治組織と見なす見解が主流になりつつある)。しかし、古墳時代前期に薩摩から陸前に至る政治的統合体が成立し、中央における政治的変動の影響が墳丘規模の規制などの形で全国に波及するようになったのであれば、倭王武が「昔より祖禰躬ら甲冑を撰き、山川を跋涉し、寧処に違あらず」と表現した征服戦がなぜ遂行されなければならなかったか(これを宋の皇帝に自らの労苦をアピールするためのフィクションと見なすのであれば)、またすでに前方後円(方)墳の分布圏に入ってしまったはずの九州南半を隼人の地、陸前を蝦夷の地として執拗な征服戦を繰り返さなければならなかったのかが説明できなくなる。近畿中央の大首長と地方首長との間で、威信財の授与や古墳築造の承認などを介して形成された即物的政治的関係は、短期間に広範に締結することが可能な半面、当事者間だけのものであって、双方の世代交代などのたびに再確認を要した脆弱なものであった。これを制度や機構で裏付けられた揺るぎない地方支配体制に整備するには、5世紀末から7世紀にかけての長い時間を要し、しかも対外関係の緊迫(外圧)により余儀なく行われたものであった。その過程でようやくそれ以前の威信財の授受を要する即物的段階を脱するが、それらの制度も、7世紀前半までは、近畿中央部のウチおよびそれに相当する地方の族的集団の成立を前提に、各ウチに族姓標識としてのカバネを与えて身分編成をおこない、ウチ名を与えて王権にかかわる各種職務を分担させ、地方首長を国造に任命して屯倉や部民の管理といった奉仕をさせる体制であって、より組織的・制度的・永続的なものとはなかったが、支配者層の結集は氏族制原理を脱することができなかった。

E. 前方後円墳の出現

最古の定型的・大型前方後円墳たる箸墓の主が卑弥呼か壺与かその後の王か説が割れており、前方後円墳の出現が3世紀中葉から後半のどこに当たるのかも説が割れているが、箸墓など成立期前方後円墳の諸要素を分解して起源を探ると、先学が唱えたように(寺沢2000・北條2000)、各地の墳丘墓の要素のコラージュと見るほかになく、共立された政権の内実を伺わせる。

諸要素の後期後葉～終末期における分布から、墳形のうち後円部は吉備・東瀬戸内・近江、前方部は吉備・東瀬戸内・近江・東海、葺石・大型墓坑・竪穴式石槨は吉備・東瀬戸内、円筒埴輪は吉備というように大和在来の要素はほとんどない。判断が分かれるのは、どこの影響をより強く見るかである。

墳形では、各地の前方後円形墳丘墓・前方後方形墳丘墓の土器編年上での位置と、各地域の土器編年と大和における庄内式土器細分小期との時間的關係に対する考え次第となる。たとえば、宮山型特殊器台を出土する総社市宮山・岡山市矢藤治山と、同じく宮山型を出土する箸墓古墳との前後関係が、箸墓→宮山・矢藤治山なら後者は古墳となろうし、宮山・矢藤治山→箸墓なら、前者は纏向型に対する寺沢薫氏の評価(寺沢1988)と同じく前方後円墳の先祖の候補となろう。正反対の評価となるが決定は決して容易ではない。宮山型を共有しているから、遠隔地で土器編年の微妙な並行関係だけが決め手の場合、各研究者の「期待する結論」や全体構想に左右される。大和における纏向型(石塚・勝山・矢塚・ホケノ山等)の年代すら箸墓との関係では先行説(石野2002・寺沢2002)・並行説(近藤2001)があって譲らない。鶴尾神社4号墳と箸墓との埋葬様式の影響関係の方向も、鶴→箸説(北條1999)、箸→鶴説(大久保2000)が対立する。

しかし、前方後円形に拘らず、前方後方形墳丘墓をも前方後円墳の後方部の起源に加えれば、近江・美濃・尾張では箸墓に先行する例は確かにあるから、箸墓に先行する突出部付き円形ないし前方後円形墳丘墓(纏向型と呼ぶかどうかはともかく)があって不都合はない。纏向型自体の起源では、土器から見て終末期における大和と近江・東海との交流は密であるから(石野2004)、前方後方形墳丘墓が、葺き石を欠く石塚・勝山・矢塚への影響元である可能性は大きい。他方で葺石・石垣・木槨をもつホケノ山への影響元については、吉備・阿波・讃岐などの突出部付き円形墳丘墓を外せない。

後期後葉から終末期における鏡・鉄製武器・玉類などの入手元とその副葬習俗の発信地を北部九州と見る説(寺沢2000)が根強いが、この時期の副葬実態から見れば、近畿北部・北陸を主と考えた方が良い。ほかに、古墳時代におけ

る碧玉製腕飾類、遡っては芝ヶ原12号墳の銅釦の祖形たる南海産巻貝製腕輪類(ゴホウラ・イモガイ・オオツタノハ)の系譜は、中期の北部九州製品でなく、この時期の南部九州→東部九州経由の製品に求めるべきであり、日向における終末期の円形墳丘墓の盛行は、東瀬戸内集団と日向灘沿岸部集団との密接な関係の物証である。

北部九州における前期末～中期末と同様に、2世紀末における舶載品の多量流入の再開は、その掌握・管理・分配を通じた諸集団の組織化が短期間に進行する契機となった。しかも今回は舶載品を主とする「威信財」の主要流入経路が後期中葉以前と切り替わったため、後期中葉以前の体制の再編成を促し、結果として、中・東部瀬戸内、近畿中部、近畿北部・北陸、近江・東海どうしの複雑・密接な結び付きをもたらすこととなった。これが卑弥呼共立の地盤であって、邪馬台国が伊都国に一大率を派遣し対外交通を厳しく監督する必要があったのは、北部九州が当初コントロール下に十分入っていなかったからである。

この終末期体制は、卑弥呼の魏への遣使と、魏からの新たな価値付け可能な威信財(三角縁神獣鏡かどうかはここでは不問)の多量かつ、流入ルートを1本に絞った集中的流入を契機に、再度二次的に編成替えされ、近畿中部を中心とした一元的な首長ネットワークの形成をもたらした。

ただし、3世紀後半に成立した首長ネットワークでは、威信財の贈与と何らかの奉仕という首長間の関係は、田中良之氏の研究が明らかにしたように、首長の継承がまだ安定していないという状況を前提として、そのつど更新しなければならず、なかなか組織的・制度的なものにはならなかった。さらに舶載威信財の品目の交替、自家製威信財の創出といったやり繰りを続け、ようやく5世紀後半に至って、首長の継承の安定化を前提にウチないしそれに相当する地方の集団が形成されると、継承の承認と引き換えに地方豪族を王宮に奉仕させる体制を経て、6世紀に中央ではウチごとに特定の職掌を与えて王権に奉仕させて部民の保有を認め、地方では在地首長層を国造・伴造として組織し義務を与え部民の管理・支配を承認する体制を作り、しだいに制度的・組織的な統治機構建設へと向かっていった。「前国家段階」への突入である。(2006年11月24日第一次稿了、2009年11月30日改稿了)

小稿の執筆にあたっては、九州大学比較社会文化研究院の田中良之氏の研究成果および日常のご教示に負うところが多かった。また、九州大学人文科学研究院の辻田淳一郎氏にも種々ご教示頂いた。篤く御礼申し上げたい。

※ 注 ※

注1： 2006年の調査によって、纏向石塚の周囲に布留式期の方形周溝墓が群在することが判明した。石塚の被葬者は、集団から切り離された個人として箸墓被葬者周囲にいたのではなく、親族集団を伴っていた。

注2： 近年、溝口説の引用が増えているが(松木2002a・b、角南2002、堀2004、大庭2005)、田中説に目配りする研究が意外なほど少ないのは遺憾である。なお田中説は印刷物としては2000年に発表されたが、口頭では1998年3月に九州大学での「基層構造フォーラム」で発表されており、溝口氏もそれを念頭に置いている。

注3： 松木武彦氏は、当地の後期の墳丘墓の被葬者が複数であることから、それら墳丘墓は集団墓にすぎず「集団のなかから階層的に析出された特定個人」の首長墓ではないと断ずる(松木2002)。しかし、弥生時代には個人や家族が析出しきれておらず、絞込みの動きが古墳時代前期まで継続する(田中2004)ことからすれば、当地の後期段階で絞り込み途上なのは当然であり、終末期から古墳時代初頭にかけて並列型・単数型が顕著になるから、やはりそれなりに絞込みが進行することが重要である。

松木氏は弥生時代から古墳時代への墓制の変化を、「集団的アイデンティティ」・「血縁関係内での位置」よりも、「集団を構成していた個々人とその係累という小単位」・「個別小家族」・「被葬者個々人」が各々の「アイデンティティ」・「社会的パーソナリティ(身分・職掌・ジェンダー等々)」・「存在の実存性」・「社会的位置や経済的・政治的役割」を墓制に表示する社会になったと評価した(松木2002a・2002b)。松木氏がこのように、「個々人や個別小家族」の血縁関係内での位置よりも、新しい社会経済システム内での位置が表現されるようになったとみなし、その背景に新しい社会経済システムやそれに根ざした複合化社会の成立を重視するのは、「血縁から地縁へ」図式の焼き直しであって、弥生時代から古墳時代への移行を、首長制社会から国家ないし初期国

家への移行と評価し、そのベースに社会の編成原理の根本的転換(個別小家族の自立化)を認めようとする理論的要請が裏にあると言えよう。しかし田中良之氏(2004)や岩永が主張してきたように、弥生時代社会と古墳時代社会との間に社会組織の根本的差はないと考えれば、吉備における後期から終末期の現象は、まさしく「有力クランから有力な家族集団が析出」される中途の段階と評価して問題無い。松木氏の主張は、表向きの看板(マルクス主義ドグマからの脱却)とは異なり、弥生時代の終了時における「共同体の解体と家族の自立」と言う、1970年代前半以前のマルクス主義的有力学説への先祖がえりの観がある。なお、社会組織のインフラの変化は、5世紀後半、それに伴う政治組織の顕著な変化(これが古墳群の変化に現象する)は6世紀に入ってからで、一段階遅れるのである。

注4： 前中期古墳における祭祀が、基本的には埋葬時のみで継続性・反復性がないのはこのためであろう。ただし5世紀後半以降、特定集団の祖の墓と認識され祭祀の対象に選定された古い古墳はあるだろう。古代の天皇陵の認定もこの類。首長墓での祭祀が、継続的・反復的なものになるのは5世紀後半以降、広域的には6世紀以降である。墳墓祭祀の対象が、漠然とした集団の祖霊(氏族横断的)から氏族単位→親族集団→家族というように次第に個別的な対称へと絞り込まれると、集団の団結が、現存の人物との関係でなく祖先との関連で決まるようになり、祖先祭祀が重要となる。

※参考文献※

- 赤塚次郎 1992「東海系のトレース」『古代文化』44巻6号
 赤塚次郎 1995「前方後方墳から見た初期古墳時代」『第3回東海考古学フォーラム 前方後方墳を考える』
 赤塚次郎 1996「前方後方墳の定着」『考古学研究』170号
 秋山浩三 2006「吉備・近畿の交流と土器」『古式土師器の年代学』
 石川日出志 1999「南関東の墓制」『季刊考古学』67
 石野博信 2002『邪馬台国と古墳』.学生社,東京
 石野博信 2004「箸中山古墳への道」『地域と古文化』
 岩永省三 1989「土器からみた弥生時代社会の動態—北部九州地方の後期を中心として—」『生産と流通の考古学』
 岩永省三 1996「神庭荒神谷遺跡出土銅剣形祭器の「細かい研究」」『出雲神庭荒神谷遺跡』
 岩永省三 2002「階級社会への道への路」『古代を考える 稲・金属・戦争』.吉川弘文館,東京
 岩永省三 2003「古墳時代親族構造論と古代国家形成過程」『九州大学総合研究博物館研究報告』第1号
 植田文雄 2001「出現期前方後方墳の検討」『みづほ』36
 植田文雄 2002「前期古墳の様相—近畿北部・北陸—」『日本考古学協会2002年度榎原大会資料集』
 植田文雄 2004「近江における出現期古墳の様相」『神郷亀塚古墳』
 宇垣匡雅 1998「吉備弥生社会の諸問題」『考古学研究』45-1
 宇垣匡雅 1999「吉備の墓制」『季刊考古学』67
 多賀茂治 2004「兵庫丹波の弥生墳墓」『台状墓の世界』
 大久保哲也 2000「四国北東部地域における首長層の政治的結集」『前方後円墳を考える』
 大庭重信 2005「方形周溝墓制の埋葬原理」『考古学ジャーナル』534
 大村 直 1995「東国における古墳の出現」『展望考古学』
 小沢佳憲 2000「弥生集落の動態と画期—福岡県春日丘陵を画期として—」『古文化談叢』44
 小沢佳憲 2002「弥生時代における地域集団の形成」『究班』II
 小山田宏一 1994「大阪湾沿岸の弥生時代後期の円形周溝墓」『考古学ジャーナル』374
 角南聡一郎 2002「畿内における弥生墳丘墓の特徴」『考古学ジャーナル』484
 河野一隆 1998「副葬品生産・流通システム論」『中期古墳の展開と変革』
 キーピング(小川・笠原・河合訳) 1982『親族集団と社会構造』.未来社,東京
 熊谷公男 2001『大王から天皇へ』.講談社,東京
 桑原隆博 2005「四隅突出型墳墓の新展開」『季刊考古学』92号,雄山閣
 桑原久男 1995「弥生時代における青銅器の副葬と埋納」『西谷眞治先生古希記念論文集』
 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』.岩波書店,東京
 近藤義郎 2001『前方後円墳と吉備・大和』吉備人出版,岡山
 清水眞一 2003「大和の弥生時代方形周溝墓と台状墓」『榎原考古学研究所論集』第14
 高橋浩二 2005「北陸の弥生墳墓から古墳へ」『季刊考古学』92,雄山閣

- 但馬考古学研究会・両丹考古学研究会 2001『北近畿の考古学』
- 但馬考古学研究会・両丹考古学研究会 2004『台状墓の世界』
- 田中良之 1995『古墳時代親族構造の研究』, 柏書房, 東京
- 田中良之 2000「墓地から見た親族・家族」『古代史の論点』2, 小学館, 東京
- 田中良之 2004「人骨・墳墓から見た前半期古墳時代集団構造の研究」(平成14～15年度科学研究費補助金研究成果報告書)
- 谷口恭子 2004「因幡の弥生墳墓」『台状墓の世界』
- 寺沢 薫 1988「纏向型前方後円墳の築造」『同志社大学考古学シリーズIV 考古学と技術』
- 寺沢 薫 2000『王権誕生』講談社
- 寺沢 薫 2002「纏向型前方後円墳の誕生」『邪馬台国時代の吉備と大和』
- 遠山美都男 1993『大化改新』中央公論社
- 難波洋三 1997「国産のはじまりとその広がり—近畿を中心に—」『弥生の鋳物工房とその世界』, 北九州市立考古博物館
- 西川修一 2002「南関東における古墳出現過程の評価」『月刊文化財』470
- 服部信博 1994「改変された墳丘墓」『考古学ジャーナル』374
- 比田井克仁 1997「定型化古墳出現前における濃尾、畿内と関東の確執」『考古学研究』174
- 福島孝行 2003「弥生終末期の墓制と古墳の出現」『季刊考古学』84
- 福永伸哉 1998「銅鐸から道鏡へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店, 東京
- 古川 登 2003「北陸地方における古墳の出現」『風巻神山古墳群』
- 古川 登 2004「3世紀の越の四隅突出型墳丘墓」『邪馬台国時代の越と大和』
- 北條芳隆 1999「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』
- 北條芳隆 2000「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす』青木書店, 東京
- 堀 大介 2004「コシ政権の誕生(上)(下)」『古代学研究』166・167
- 前田清彦 1997「前方後方墳造営の背景」『加賀 能美古墳群』
- 正岡睦夫 2005「北四国の弥生墳墓」『季刊考古学』92
- 松井 潔 1999「因幡・伯耆・出雲の墓制」『季刊考古学』67号, 雄山閣
- 松木武彦 1996「日本列島の国家形成」『国家の形成』, 三一書房
- 松木武彦 1997「ヤマト政権成立の背景」『卑弥呼誕生』弥生文化博物館
- 松木武彦 2002a「吉備の円丘墓と方丘墓」『邪馬台国時代の吉備と大和』
- 松木武彦 2002b「吉備地域における首長墓形成過程の再検討」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』下
- 溝口孝司 1998「カメ棺墓地の移り変わり」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館
- 溝口孝司 1999a「北部九州の墓制」『季刊考古学』67, 雄山閣
- 溝口孝司 1999b「弥生時代の社会」『現代の考古学』第6巻, 朝倉書店
- 森岡秀人 2001「3世紀の近江と大和」『邪馬台国時代の近江と大和』
- 森本幹彦 2004「片山鳥越5号墓第一埋葬施設の位置付け」『片山鳥越墳墓群 方山真光寺跡塔址』
- 吉岡康暢 1997「能美古墳群の展開」『加賀能美古墳群』